

國及類
漢他南
文亥鑒

85
196

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



85-196



類字鑑

慶應義塾
大學講師 牙牛無二郎 編
(增訂三版)

附錄

漢字類似用辨	漢字熟語用辨	正字誤字	和字大要	故事成語	候文の用法及例	國語假字遣	字音假字遣
--------	--------	------	------	------	---------	-------	-------

大正
9. 3. 31
購求

國漢文類字鑑 及作文類字鑑

緒言

一試みに方今學生の作文を取りて一見せんか、文章の巧拙は姑くおき、「惡しからず」を「足からず」、「重んず」を「思んず」、「無功を」、「無行」、「事業を」、「業」、「美麗」を、「美禮」など、書きて、平然たる者尠からず。されば況や、「知識」を、「知識」、「慈善」を、「滋善」、「實驗」を、「實驗」、「幸福」を、「孝福」など、書くが如きに至りては、實に僕を更ふるも終すこと能はざるの感あらむ。かゝれば、その同訓異義の文字を甄別せんとするが如きは、固より念頭に置く所にあらず。此の如きは獨、學生のみに止らず、その官吏たり實業家たる人と雖、誤を傳へて怪まざるもの多し。漢字を使用しながら、意義用法の如何を問はずして、思想交換の機關たらしめんとするは、抑、何等の心ぞ。余生徒のために和漢文

を講じ作文を授くる際、此れが矯正の具に資せんがために、彼此參照して手録せしもの、積りて本書となれり。折に觸れて足らざるを補ひ、要なきを刪りなどせしほどに、解説の體裁統一を缺き、粗笨にして、蕪雜の誹を免れず。遮莫、元これ便蒙の階梯にして、敢へて博雅の君子に示すにあらず。以て青年學生が、讀書作文上の一助ともなるを得ば、編者の望みや足れり。

一本書は、國語、漢文、作文の參考に資せんがために編めりと雖、専ら實用を旨として、只管専門語には互らず、解釋も簡に從ひて繁を避けたり。されば出典の如きも、擧げたるもあり、擧げざるもあり、旁搜博引の書は世別にあるべし。本書の主とする所は、詳密にあらずして、要領を得るにあり。分量の點に於ても、普通適切とおぼしきものは、大抵蒐集しつれば、多くは不便を感せぬなるべし。

一附録として、類似形の誤用し易き漢字、漢字熟語の混用し易き文字、及正字、俗字、誤字等の異同を辨じ、音訓假名遣をも載せたり。特に國語假名遣は編者の實驗せる考案なれば、切に讀者の高評を煩はさんとす。

一類字の和訓は、勿論同一なれども、音に至りては各、別にして、曉り難きもあれば、文字の下方に音を記せり。附録なる漢字類似辨は、字の右方に音を記し、下方に訓を記せり。正字、俗字、誤字辨は、音訓の文字を附せざる所には、音を片假名に、訓を平假名にて區別せり。これ簡單に從はんがためのみ。一本書中の或文字を看んとするには、先づ文字の和訓を知りて、五十音順によりて之を搜索すべし。若しその和訓を知らざる時は、漢字典に就きてその訓を知るを要す。元來悉く字劃に據りて搜索すべき索引ある時は、至便に相違なければ、今その煩に堪へずして省きつ。

明治四十三年春

編者識す

増補再版に就いて

こたび本書第二版を出版するにつけて、以前の誤謬を訂正し併せて候文の書き方及び故事成語篇の二篇を加へたり。前者には候文の用字法、用語法及び文例數題を選びて載せたり。候文は舊來の習慣に従ふものなるが故に、文法にかゝはらざること多く、實に我國文中の奇觀たり。されども今日尤も廣く行はれたる文體なれば、いまだ俄に之を廢すべきにあらず。然るに近來の青年中、その用字法、用語法を知らざるもの多く、「難有」と書くべきを「難有く」など認め「致度」を「致度く」「有之」を「有之れ」「有之り」「被下度」を「度被下」など書き「去迎」「屹度」「然者」とあるなどをば讀むこと能はず。「可被爲入」「被爲在」などの書きかたに至りては、心得ぬものいと多かり。某々大學を卒業しながら、なほ候文のハガキをだに、完全に認むること能はざるもの往々ある由を耳にせり。當人の不注意不熱心はさる事ながら、寧ろ教育界の恨事といはざるべからず。この一篇はその一助にもとて増補しつるなり。思ふに本書なほ誤謬多かるべし。そは三版四版を重ねて、漸次訂正を期せむとす。

明治四十五年三月

編者識す

國漢文類字鑑目次

あの部

ああ	嗚呼、噫、嗟、吁、唉、嘻、惡……………一	あはれ	暖、溫、暄、煖、煦……………六
あかし	赤、朱、丹、紅、赭、緋、絳……………二	あはれむ	中、當、方、直、丁……………七
あきらか	明、昭、灼、皎、晃、煥、炳、諱……………二	あはさ	預、與、干、關……………七
あく	覈、甄……………二	あはさむ	篤、厚、敦……………八
あく	飽、飫、厭、饜……………三	あはさむ	集、聚、輳、會、萃、纂、輯……………八
あく	擧、揚、扛、昂、颺……………四	あはさむ	跡、迹、蹟、址、痕、踪、蹤……………九
あさむく	欺、詒、瞞、誕……………四	あはさむ	侮、慢、易……………九
あし	惡、凶、醜、慝……………五	あはさむ	發、訐……………一〇
あし	足、脚……………五	あはさむ	併、戮、配合……………一〇
あした	旦、晨、朝……………五	あはさむ	憐、憫、哀、矜、恤、愍……………一〇
あだ	仇、讐、寇……………六	あはさむ	遇、逢、遭、值、會、合……………一一
あだかも	恰、宛……………六	あはさむ	敢、肯……………一二
		あはさむ	周、普、徧、遍、浹、洽……………一二
		あはさむ	餘、剩、贏……………一三
		あはさむ	危、殆……………一三
		あはさむ	誤、謬、過、愆、錯、訛……………一四
		あはさむ	豫、逆……………一五

あの部

あらし 粗糲略暴……………二五
 あらたむ 改革、悛、更……………二五
 あらはる 見現、顯著、形、露、表、彰、
 旌、暴、覺……………二六
 あらふ 洗、濯、滌……………二七
 あり 有、在……………二七
 ある 荒、蕪……………二七

いの部

いかに 如何、何如、奈何、若何……………二八
 いかた 筏、桴……………二九
 いかる 怒、憤、恚、愠、忿、瞋……………二九
 いく 生、活……………二九
 いま 軍、師……………三〇
 いま 息、憩、休……………三〇
 いま 潔、屑……………三〇
 いま 績、勳、功……………三二

いそがはし 忙、忽、急……………二二
 いたく 抱、懷、擁……………二二
 いたす 致、輸……………二三
 いたむ 悼、痛、傷、戚、慘、愴、惻、悵……………二三
 いたる 至、到、詣、造、抵、臻……………二三
 いつはり 偽、詐、伴、誦、詭、誕……………二三
 いづくんぞ 安、焉、惡……………二四
 いぬ 糸、絲……………二四
 いさげなし 幼稚、嬰、孩……………二五
 いさま 遑、暇、閒……………二五
 いぬ 寢、寐……………二六
 いのゝ 祈、禱……………二六
 いはふ 祝、賀……………二六
 いはんや 況、矧……………二六
 いふ 曰、謂、云、言、道……………二六
 いへ 家、宅、屋、舍……………二七
 いほ 庵、廬……………二七

いかに 戒、誠、警、箴……………二六
 いむ 忌、諱……………二六
 いやし 賤、卑、鄙、陋……………二九
 いゆ 瘡、瘡、瘡……………三〇
 いよよ 愈、彌……………三〇
 いる 入、納、容……………三〇

うの部

う 得、獲……………三〇
 うう 植、種、栽、樹、藝……………三二
 うう 饑、飢、饑、餓……………三二
 うかがふ 窺、伺、候、偵、謀……………三三
 うがつ 穿、鑿……………三三
 うく 受、承、享、稟……………三三
 うごく 動、搖、撼……………三三
 うしなふ 失、喪、亡……………三四
 うよし 薄、菲……………三四

うたふ 歌、謠、謳、唄……………三四
 うち 中、内、裏……………三五
 うつ 伐、討、征、打、擊、撲、拍、搏……………三五
 うつゝ 捷、颯、殿……………三五
 うつゝ 蹲、踞……………三六
 うつゝ 移、遷、徙、寫、摹、描、膽……………三七
 うつむ 埋、瘞、填、湮……………三七
 うつむ 俯、俛……………三六
 うね 畝、疇……………三六
 うはふ 奪、篡、褫……………三六
 うみ 海、洋、瀛……………三六
 うらなふ 卜、筮、占……………三六
 うらむ 怨、恨、憾、懟……………三九
 うる 賣、售、沽、賈……………四〇
 うるはし 美、麗、妍、娟、艶、妖……………四〇
 うるほふ 濕、潤、濡、霑、澤……………四一
 うれふ 憂、愁、患、恤……………四二

え(え)の部

えらぶ 撰、選、簡、擇……………四三
え 畫、繪、圖、描……………四三

お(お)の部

おきな 翁、叟……………四四
おく 置、措……………四四
おくる 送、贈、餽、饋、貽、遺、餞、贐……………四四
おこなふ 行、將……………四五
おこる 興、起、作……………四五
おこそか 莊、嚴、儼……………四六
おす 推、押、壓、擠、捺……………四六
おそし 遲、晏、晚……………四七
おそる 恐、懼、畏、怖、怕、惶、懾、悚、
懼、慄……………四七
おつ 落、墮、墜、隕、零……………四八

おどる 威、嚇、惕、喝……………四九
おどす 跳、踊(踴)躍……………四九

おどろかす 驚、駭、愕……………五〇
おふ 追、逐、趁、趕……………五〇
おほくなり 大、巨、鉅、洪、浩、碩、恢、宏、
鴻、偉……………五一

おほふ 覆、蔽、掩、蓋、庇……………五一

おほむね 概、率、約……………五二

おもふ 思、念、想、憶、懷、惟……………五三

おもむく 趣、赴、趨……………五三

およぐ 泳、泗、游……………五四

およぶ 及、逮、追、暨……………五四

おろか 愚、癡、魯……………五四

おろか 岡、丘、阜、陵……………五五

をかす 犯、侵、干、冒……………五五

をかたる 怠、惰、懈……………五五

をかてる 奢、驕、侈、倨、傲……………五六

をさむ 治、修、理、收、斂、納、藏……………五五
をしふ 教、誨、訓……………五七
をしむ 惜、吝、嗇、愛……………五八
をばる 終、畢、卒、了……………五九
をばる(こぼ) 也、矣、焉……………五九
なる 居、處……………五九

かの部

か 乎、歟、耶、夫、邪……………五九
かうばし 芳、香、馨……………六〇
かうぶる 被、蒙……………六〇
かかぐ 揭、褰、挑……………六一
かがみ 鏡、鑑……………六一
かがむ 屈、僂、局……………六一
かがやく 輝、耀、灼、赫、煥……………六二
かかると 嬰、罹……………六二
かき 垣、墻、籬、藩、堵……………六二

かきり 限、期、疆……………六三

かく 掛、懸、挂、係、繫……………六三

かぐ 欠、缺、闕、虧……………六四

かくる 隱、匿、竄、藏……………六四

かくのこらし 如此、如是、若此、若是、如斯、
若斯……………六五

かけ 蔭、陰、影、景……………六五

かける 翺、翔、翥……………六五

かさ 籠、籃……………六六

かさ 笠、傘……………六六

かさぬ 重、疊、複、累、層……………六六

かざる 飾、文……………六七

かしく 爨、炊……………六七

かすか 幽、微、杳……………六七

かすむ 掠、抄……………六七

かぞふ 計、算、數……………六八

かたし 堅、固、牢、硬……………六八

かたち	形容、貌、状、態、像	……	充	かまびすし	喧嘩、囂、聒	……	六
かたはら	傍、側	……	充	かみ	神、祇	……	六
かたる	語、談、話、譚	……	充	かむ	咬、噬、嚼、咀、嚼	……	六
かつ	勝、捷、克、戡	……	七〇	かんがふ	考、稽、案、勘、校	……	七
かつて	嘗、曾	……	七〇	からし	辛、鹹	……	七
かど	角、稜、廉	……	七一	かり	田、獵、狩	……	七
かなしむ	悲、哀	……	七一	かる	枯、槁、厦、涸	……	七
かなふ	稱、適、協、叶	……	七一	かる	刈、芟	……	七
かぬ	兼、攝、該	……	七一	かれ	彼、渠	……	七
かは	川、河	……	七二	かわく	乾、燥、渴	……	七
かは	反、革、韋	……	七二				
かはる	變、化、代、替、更、換、渝	……	七三				
かふ	飼、畜、牧、豢	……	七三				
かふ	買、沽	……	七三				
かへつて	卻(却)反	……	七四				
かへりみる	顧、省、眷	……	七五				
かへる	歸、還、反、返、復、廻	……	七五				

きの部

きく	聽、聞	……	七六				
きさし	萌、兆	……	七六				
きさむ	刻、彫	……	七六				
きしる	岸、涯	……	七六				
	軋、轆	……	七六				

くの部

きす	庇、創、傷、瑕、癥	……	八〇	くはし	精、委	……	八六
きぬ	衣、絹、帛	……	八一	くむ	汲、酌、斟	……	八六
きはむ	窮、究、極、谷	……	八一	くはる	賦、配	……	八七
きびし	嚴、緊	……	八二	くもる	絞、緘、經	……	八七
きゆ	消、滅、熄、湮	……	八二	くら	陰、曇	……	八七
きよし	清、淨、潔	……	八三	くらし	府、庫、倉、廩、藏	……	八七
きる	著、被、衣、服	……	八三	くらふ	暗、闇、昏、昧、晦	……	八八
きる	斬、斫、切、翦、截、伐、裁	……	八三	くらぶ	食、喫、餐、啖	……	八九
				くれ	比、競	……	八九
				くらしむ	苦、困、窘	……	八九
				くれ	晚、暮、昏	……	八九

けの部

けがす	汚、穢、瀆	……	九〇				
けつる	削、刪、刊、剗	……	九一				
けはし	險、峻、阻、峻、峭	……	九一				
ける	蹴、蹶	……	九一				

しゝの部

こ	子、兒	九二
こ	試、驗	九二
こたふ	答、對、應	九二
こたふ	悉、盡、畢	九三
こたふ	如、若、猶、似	九三
このむ	殊、特、異	九四
このむ	好、喜	九四
こひねがふ	冀、庶、希、幾	九四
こふ	請、乞、巧	九五
こぼす	溢、零	九五
こぼつ	毀、墮	九五
こほり	冰、凍	九五
こまやかに	密、濃、緻、續	九六
こゆ	越、超、踰	九六
これ	是、此、之、斯、維、惟、諸、旃	九六
ころ	頃、比	九六
ころす	殺、誅、戮、弑、死	九六
さ	幸、福、祐、祉、祥、禎、倖	九六
さかひ	界、境、疆	九六
さかづき	杯、盃、觴、觥、盞	九六
さかふ	逆、忤	九六
さかり	隆、盛、熾、昌、壯	九六
さき	先、往、前、曩、嚮、向	九六
さく	割、裂、剖、劈、析	九六
さぐる	探、搜、摸	九六
さげふ	號、叫	九六
ささぐ	捧、擎	九六
さしはさむ	挾、夾、插	九六
さす	刺、螫	九六
さとし	聰、敏、慧	九六

し	覺、悟、曉、喻、了	一〇三
し	覺、寤、醒	一〇四
し	晒、曝	一〇四
し	去、距、違	一〇四
し	騷、譟、噪、躁	一〇四
し	竿、棹、窩、衡	一〇五
しづか	靜、閑、徐、謐、寂、寥、閭、寞	一〇九
しづむ	沈、淪、涵	一一〇
しぬ	死、崩、薨、卒、歿、天	一一一
しばしば	數、屢、亟、驟	一一一
しばらぐ	暫、姑、須、臾、頃、刻	一一一
しふ	強、誣、罔	一一三
しほむ	凋、萎	一一三
しむ	使、令、教、俾、遣	一一三
しりぞぐ	退、卻、却、斥、屏、擯、黜	一一三
しる	知、識	一一四
しるし	徵、證、効、驗	一一四
しるす	記、紀、識、錄、誌、題、署、勒	一一四
しろ	城、堡	一一五
しろし	白、素、皓、皚、皎	一一六

しの部

しかり	然、爾	一〇五
しかる	叱、訶	一〇六
しまりに	頻、連、荐、累、切	一〇六
しく	布、敷、席、藉、鋪	一〇六
しく	及、如、若	一〇七
しげし	繁、茂、稠、蕃、滋	一〇七
したがふ	從、順、隨、循、遵、率	一〇八
したしむ	親、昵、暱	一〇九
したふ	慕、欽	一〇九
ず	不、弗	一一六

すの部

すま	覺、縛	二七
すま	過、邁、絶	二七
すくなし	少、寡、鮮、尠	二七
すくふ	救、拯、濟	二八
すぐる	勝、尤、俊、豪、傑	二八
すこし	些、瑣	二九
すまぐ	雪、漱、澣	二九
すまむ	進、勸、薦、獎、前、羞	二九
すつ	捨、棄、廢、委、釋、捐、遺	三〇
すでに	既、已、業	三〇
すなはち	則、卽、乃、輒、便、載	三〇
すなほ	朴、素、質	三〇
すべて	總、凡、都、渾、統	三〇
すみやか	速、亟	三一
すむ	住、棲、栖	三一
すむ	清、澄	三一

せはし	狹、隘、褊、窄	三三
せまる	迫、逼、薄	三四
せむ	攻、責、譴、讓	三四
そなふ	害、損、傷、殘、賊、戕	三五
そしる	誹、謗、譏、毀、詆、訾、刺	三五
そそぐ	注、沃、澆、瀉、洒、澆、灌、灑	三六
そなふ	具、備、供	三七
そはたつ	敲、側、峙	三七
そむく	叛、畔、反、背、倍、乖、負	三七
そらんず	諄、誦	三六
それ	夫、其	三六

せの部

その部

たの部

たかし	高、崇、隆、喬	二六
たかどの	樓、閣	二六
たかひに	互、迭、遞	二九
たがふ	差、違	二九
たから	寶、財、貨、費	三〇
たき	瀑、瀧	三〇
たくはふ	貯、蓄、儲	三〇
たくひ	類、匹、疇、屬、比、倫	三三
たくみ	巧、工	三三
たけなほ	酣、闌	三三
たまく	輔、佐、佑、助、扶、援、翼、相、資、贊	三三
ただ	唯、惟、只、但、徒、雷	三三
ただかふ	戰、鬪、格	三三
たたく	叩、敲、扣	三三
ただす	正、訂、糾、匡、規、繩、格、貞	三四
ただちに	直、徑	三四
たたる	糜、爛	三五
たあまぢ	忽、乍、倏、頓	三五
たつ	立、建、起、豎、植、樹	三五
たつ	斷、絕、截、裁	三六
たつぬ	尋、原、討、踪、釋	三六
たて	干、盾	三七
たて	縱、經、表	三七
たてまつる	上、奉、獻、呈	三七
たひ	縱、縱、令、假、假、令、假、使	三六
たひ	譬、喻、例	三六
たひ	谷、谿、溪、壑、澗	三九
たのしむ	樂、娛、嬉、愉	三九
たのむ	賴、估、恃、憑、負	四〇
たひらか	平、坦、夷	四〇
たふ	堪、耐、任、勝	四〇
たふとし	尊、貴、崇、尚、上	四一
たふる	倒、仆、斃、殞、顛、踣、僵	四一

たま	玉、珠、璧、圭、瓊、球……	一四二
たまたま	適、偶、會……	一四三
たまもの	賜、祝、賚……	一四三
たまりみつ	潦、瀦、溜……	一四三
たみ	民、氓……	一四四
たる	足、贍、給……	一四四
たれ	誰、孰……	一四四
ちの部		
あかし	近、邇、庶……	一四四
あかふ	盟、誓、矢……	一四五
あち	父、考……	一四五
ちまた	街、巷、衢……	一四五
ちり	塵、埃……	一四六
ちる	換、散……	一四六
つの部		
ついで	序、敘、秩……	一四六
つかあふる	掌、典、司、主、宰……	一四七
つかふ	使、仕、事……	一四七
つかる	疲、憊、罷、羸……	一四七
つゝ	就、著、卽、付、附……	一四八
つゝ	突、衝、撞、擣……	一四八
つゝ	續、繼、嗣、接、次、亞、襲……	一四九
つゝ	告、諭、誥……	一四九
つゝ	盡、竭、悉、罄、殫、殲……	一五〇
つゝ	作、造、製、爲……	一五〇
つち	土、壤、地……	一五一
つちむ	謹、慎、肅、欽、恪……	一五一
つちみ	堤、防、塘、坡、塢……	一五一
つちむ	包、裹、韜、蘊……	一五二
つちむ	勤、勉、務、勛、力、努……	一五二
つねに	常、恆、每、庸……	一五三
つひに	遂、終、竟、卒……	一五四

つばねに	具備……	一五五
つまびらかに	詳、審、諦……	一五五
つまつく	蹶、跌、蹉、跲、躓……	一五五
つみ	罪、辜……	一五五
つよし	強、勁、毅……	一五五
つらなる	連、聯、陳、列、羅……	一五五
ての部		
てらす	照、燭……	一五五
との部		
とがむ	咎、尤、科……	一五七
とる	時、秋、辰……	一五七
とる	研、磨、砥、礪……	一五八
とる	所、處……	一五八
とし	年、歲、稔……	一五八
とし	疾、迅、敏……	一五九
つひの部		
つひ	閉、闔、鎖、緘、杜、封……	一五九
つひ	齊、整、調……	一六〇
つひ	留、駐、停、止、遏……	一六〇
つひ	唱、稱、徇……	一六〇
つひ	帷、帳、幔、幌……	一六一
つひ	問、訪、訊、咨、詢……	一六一
つひ	飛、霏……	一六一
つひ	烽、燧……	一六一
つひ	遠、遐……	一六一
つひ	乏、匱……	一六一
つひ	通、徹、透、融……	一六二
つひ	朋、友……	一六三
つひ	輩、曹、儕、徒……	一六三
つひ	燈、燭……	一六四
つひ	共、俱、偕、與……	一六四
つひ	捕、捉、囚……	一六四
つひ	俘、虜、擒……	一六四

ざる

取、執、採、把、攪、操、乘……一五

なみ

波、浪、濤、瀾……一七一

なの部

なみた

涙、涕……一七一

ながし

長、永、脩……一六

なやむ

腦、艱、難、懊……一七一

なかたぢ

媒、灼、介……一六

ならぶ

習、效、倣、倣、肄……一七二

なかれ

勿、母、無……一六

なる

並(竝)并(併)雙、排、比……一七二

なく

鳴、啼、泣、哭……一七

なんぞ

馴、狎、狃、慣……一七三

なげうつ

抛、擲……一七

なんぢ

何、奚、曷、安、盍、焉……一七三

なげく

嘆、嗟、慨……一七

なんぢ

汝、爾、卿……一七四

なし

無、莫、亡、靡、罔……一六

への部

乎、于、於……一七四

なす

爲、成、作、濟……一六

に

賑、贍……一七五

なづ

撫、摺、摩……一六

にぎはす

逃、遁、亡、北、脫……一七五

なほ

繩、索、縲、紲……一六

にくむ

惡、憎、疾……一七六

なほ

靡、嬖、鼻……一六

にくむ

濁、溷……一七六

なほし

猶、尚、仍……一七

にじ

虹、霓……一七六

なまごさし

直、縮……一七

になふ

荷、擔……一七七

なまごさし

腥、羶……一七

になふ

荷、擔……一七七

にはかに

俄、遽、暴、驟、卒……一七

のぞむ

望、臨、蒞……一八一

にらむ

睨、睚……一七

のぶ

述、陳、宣、演、敘……一八一

にる

煮、烹、煎……一七

のぶ

伸、延、舒、暢、展……一八二

にる

似、肖、彷彿……一七

のぼる

登、上、升、昇、騰、陞……一八二

ぬの部

のみ

耳、已、而已、爾……一八三

ぬぐ

拔、抽、挺、擢……一七

のみ

飲、吞、嚥……一八三

ぬすむ

盜、竊、偷……一七

のる

法、則、刑、律、儀、式、典……一八四

ねの部

はの部

乘、騎、駕……一八四

ねたむ

嫉、妬……一七

はか

墳、墓、冢、塋……一八五

ねむる

睡、眠、寢、寐、瞑……一七

はかる

謀、計、籌、策、圖、度、量、料……一八五

ねんころ

懇、懇、懇、苦……一八〇

のの部

はく

測、算、議……一八五

のこす

殘、貽、遺……一八〇

はじめ

吐、噴、嘔……一八七

のぞく

除、蠲、攘……一八〇

はしる

箱、匣……一八七

への部

初、始、創、首……一八七

ぬの部

走、奔、趨……一八八

はす	馳、驅、聘	二八	ひく	引、曳、牽、挽、輓、掣、延、惹	一四
はた	旌、旗、幟、旆	一八九	ひげ	鬚、髯、髭	一五
はたへ	肌、膚	一八九	ひさぐ	鬻、販	一五
はち	恥、辱、羞、慚、愧、忸、怩	一八九	ひそかに	密、竊、潛、私、陰	一六
はなす	話、談、語	一九〇	ひたす	浸、漬、漸、涵	一六
はなはた	甚、酷、太、苦	一九〇	ひたす	均、等、齊	一七
はなつ	放、發、縱	一九一	ひとつ	一、壹、隻	一七
はは	母、妣	一九一	ひとへに	單、偏	一七
はやし	早、疾、速、夙、蚤	一九二	ひとり	獨、孤、特	一六
はらふ	掃、拂、攘、擺、祓	一九二	ひねる	捻、撚、捫	一六
はり	針、鍼	一九三	ひま	隙、罅、間、罅	一六
はる	晴、霽	一九三	ひらく	開、闢、啓、拓、闡、祛、發、披	一九
はるか	遙、遐、杳、遼、遠	一九三	ひるがへる	翻、飄、翻	二〇
ひきし	低、卑、矮	一九四	ひろし	廣、博、弘、闊、寬、宏	二〇
ひきめる	率、帥	一九四	ひろぶ	拾、撫、捃	二〇

ふの部

ふ	經、歷、閱	二〇一	ほからか	朗、廓、豁、洞	二〇七
ふくむ	含、銜、哺	二〇一	ほこる	誇、矜、伐	二〇八
ふまがる	塞、壅、窒	二〇一	ほこ	戈、矛、戟、槩	二〇八
ふす	俯、伏、偃、臥、俛	二〇二	ほし	星、辰	二〇九
ふせぐ	防禦、拒、扞、捍	二〇三	ほしくま	縱、恣、擅、橫、放肆	二〇九
ふむ	踏、蹈、履、踐、蹂、躪、躡	二〇三	ほそし	細、織	二一〇
ふるし	古、舊、故、陳	二〇四	ほんた	殆、幾	二一〇
ふるふ	奮、震、振、揮、顛、戰	二〇五	ほのほ	側、畔、邊、瀕、陲、頭	二一〇
へし	可、當、宜、應、須	二〇六	ほほ	粗、略、約	二一一
へたつ	隔、阻	二〇六	ほむ	賞、譽、褒、美、讚、贊、稱、頌	二一一
へつらふ	佞、諛、諂、諂	二〇七	ほゆ	吠、吼、咆哮	二一一
へる	減、耗	二〇七	ほり	壟、壕、隍、渠	二一一
			ほる	雕、琢、鐫、鑿、掘	二一一
			ほるぶ	滅、亡、喪、泯	二一一

ほの部

まの部

まがる	曲枉、鈎	二二四	まよふ	迷惑	二二〇
まぐ	負、輸	二二四	まらう	賓、客	二二二
まごど	誠、信、眞、實、固、諒、洵、允、悃	二二四	まれ	稀、罕	二二二
まごに	正、當、方、將、且	二二五	まろし	丸、圓、團	二二二
まごる	優、勝、愈、賢	二二六	まをす	申、白、奏、稟、啓	二二二
まじはる	交、雜、參、錯、混	二二六			
ます	増、益、滋、倍	二二七	みの部		
また	又、亦、復、還	二二七	身躬		二二三
まつ	待、俟	二二八	詔、勅		二二三
まつし	貧、窮	二二八	溝、渠、洫		二三三
まつたし	完、全	二二九	妄、猥、濫、漫、叨、浪		二三三
まつり	祭、祀、祠	二二九	亂、擾、紊、紛、攪、淆		二三三
まどふ	纏、絡、紆	二二九	道路、途、徑		二三三
まもる	守、護、衛	二三〇	充、實、滿、盈		二三四
			自、親、躬		二三四
			綠、翠、碧		二三五
			皆、咸、僉		二三五

みね
みる

峯、嶺、岑	二二六
見、視、觀、覽、看、瞻、視、觀、睹、相、瞰、覲	二二六

むの部

むかふ	向、迎、邀、鄉、嚮、對、迓、逆	二三七
むくゆ	報、酬、酢	二三八
むまほる	貪、婪、饕、餮	二三九
むしばむ	蠹、蝕	二三九
むせぶ	咽、噎、哽	三三九
むち	鞭、笞、策、箠、撻	三三九
むなし	空、虛、曠	三三〇
むら	村、邑、落	三三〇

めの部

め	目、眼	三三二
めぐる	巡、廻、繞、遠、周、旋、運、轉	三三二

めす

匝、紫、匯	二三二
召、徵、辟、聘	二三二

もの部

もし	如、若、儻	二三三
もつて	以、用、將、庸	二三三
もつとも	最、尤	二三四
もつばら	專、純、一	二三四
もてあそぶ	玩、弄	二三四
もど	本、原、元、素、舊、故、固	二三四
もどむ	求、索、覓、需、干、徵、要	二三五
もどる	悖、戾、很、復	二三六
もの	者、物	二三六
もろし	脆、盪	二三七

やの部

や	乎、哉、耶、居	二三七
---	---------	-----

みの部 むの部 めの部 もの部 やの部

やく	焼、焚、燎、灼……………二二七	ゆづる	禪、讓、遜……………二四四
やしなふ	養、鞠、畜、育……………二二八	ゆはり	尿、溺、旋、洩……………二四四
やす	瘦、瘠……………二三六	ゆふ	夕、晡……………二四五
やすし	安、寧、康、泰、易、綏……………二三九	ゆるし	緩、弛、寬、徐……………二四五
やすひ	備、雇……………二三九	ゆるす	許、赦、免、宥、釋、恕、縱、容、 允、放……………二四六
やすむ	宿、舍、次……………二四〇	ゆる	故、肆、所以……………二四七
やすむ	楊、柳……………二四〇	よ	世、代……………二四八
やすむ	柔、軟、和……………二四〇	よく	能、善、克……………二四八
やすむ	敗、破、敵、壞……………二四〇	よし	善、良、好、嘉、佳、吉、淑……………二四八
やすむ	疾、病、疫、痾、痢……………二四一	よふ	呼、喚……………二四九
やすむ	止、已、息、罷、歇、休、輟……………二四一	よむ	讀、誦、諷、咏……………二四九
やすむ	寡、孀、嫠……………二四二	よる	自、由、道、從……………二五〇
やすむ	稍、良、寢、較……………二四二	よる	夜、宵……………二五一
ゆ	行、往、之、逝、適……………二四三	よる	因、依、據、賴、倚、寄、憑、凭……………二五一
ゆたか	豐、饒、裕、胖、寬、優……………二四三		

よの部

縁、仍……………二二五	ら	被、見、所、爲……………二四四
よまひ	甲、鎧、介、函……………二二五	
よろこぶ	喜、悅、歡、欣、怡、懌、愉……………二二五	

らの部

わの部

わかし	若、少、弱、壯、天、嫩……………二二五
わかつ	分、別、判、頌、班、訣……………二二五
わく	涌、沸、洶……………二二五
わざはひ	禍、災、殃、咎……………二二五
わさる	遺、忘……………二二五
わたる	渡、濟、涉、互、彌……………二二五
わづか	僅、纔、才、財、裁……………二二五
わらふ	笑、哂、嗤、咲、哈、莞……………二二五
われ	我、吾、余、予……………二二五

附 録

漢字類似辨……………	自二六一
漢字熟語用例……………	至二七六
正字俗字誤字辨……………	自二七七
和字大要……………	至二八〇
故事成語篇……………	自二八二
候文の用字用語法及文例……………	至二八六
國語假字遣歌……………	自二八七
字音假字遣……………	至二八八

國漢文類字鑑目次終
及作文

國漢文類字鑑

新井無二郎編

あの部

あゝ

嗚呼 噫 嗟 吁 唉 嘻 惡

その用法廣く、嘆美にも、哀傷にも、悲痛にも、總べて通用す。「サテモ〜」と譯す。例 嗚呼、盛なるかな。嗚呼、悲しいかな。

痛恨、鬱憤の時に發する辭「エ」と譯す。例 噫、斗筭の人、何ぞ算ふるに足らん。

感心して發する辭「コレハ〜」と譯す。例 嗟、我住むに處なし。

怪疑のをりに發する辭。「サリトハ」と一考していふ。例 吁、君何を見ること

の晩きや。

怒罵の時に發する辭「チエ〜」と譯す。例 唉、豎子與に謀るに足らず。

悲痛の聲、中心より出づる辭。深く悲む時「キイ」といふ聲を出すに當る。例 嘻、

子書を読みて遊説することなかれ。

あの部 ああ

【あかし】 悪

驚歎に、怒氣を帯びたる辭。例 悪是れ何の言ぞや。

赤 朱 丹 紅 赭 緋 絳

あか色の中にて、濃淡の中を得たるもの。例 赤地。赤心。赤誠。赤繩。赤裸々。

赤よりも少し色濃きもの。例 朱袍。朱冠。紫の朱を奪ふ。

赤の色濃きもの。丹砂の色にて、稍や黒みを帯ぶ。例 顔は渥丹の如し。

桃色の濃き色にて、べにの色なり。即ち赤に白を混じたるもの。例 紅梅。紅顔。

二月の花よりも紅なり。

べにがら色にて、赤と黒との混合せしもの。赭山。赭石。代赭。

燃え立つばかりの花々しきあか色。所謂、深紅色なり。例 緋の袴。緋の衣。緋縮緬。緋鹿の子。緋緞の鏡。

赭の色に同じ。

【あきらか】

明

明 昭 灼 皎 晃 煥 炳 諦 覈 甄

明よりは狭義に用ゐらる。例 明德を昭にす。昭々。顯昭。宣昭。

火の燃えたつ如く明かなるにいふ。例 照灼。

明に潔白の意を帯ぶ。例 月出皎兮、詩經。

あざやかに明かなる意。

はなやかに明かなること。例 煥乎有文章、論語。

ありくくと見ゆる意。例 炳如。炳乎。

詳明の意。例 諦視。

「アキラカニス」と讀む。紛はしく隠れたること、又は入り組みたることを穿鑿して、其實證を發見する意。例 檢覈。

みわけのつくこと。例 甄別。

飽 飫 厭 厭 厭

十分に満足する意。厭嫌の意にはあらず。例 德に飽く。食に飽く。

馳走にあくこと。

あぐみ満ちて、いやになる意。厭と通用す。例 厭忌。厭倦。厭世。

【あ】 厭 飫 飽 甄 覈 諦 炳 煥 晃 皎 灼 昭

【あぐ】 饜

大食して、飽き満つるなり。例 酒肉に饜いて後反る。

舉 揚 扛 昂 颺

下の物を取りあぐること。措の意と相反す。猶、他に取行ふの意をも含めり。

例 推舉 選舉 一舉手 檢舉 盛舉 美舉 舉行

風に吹かれて、あがるが如く、飛びあがる意。抑の意と相反す。例 紙風を揚ぐ。

旗を揚ぐ。名を揚ぐ。我武維揚。宣揚 發揚 激揚 抑揚 意氣揚々。

重き物をさしあぐる意。例 鼎を扛ぐ。

氣のあがること、あふのくこと。例 激昂 軒昂 意氣昂然。

風に乗じてあがることにて、揚に通ず。例 颺言 舟搖々として軽く颺る。

【あさむく】 欺 詒 瞞 誕

侮りてだますこと。例 君子は欺くべし、罔ふべからず。詐欺。

給の字と通用す。單に、だます意。

護の字と通用す。漠然たることをいひて、だますこと。例 欺瞞 瞞著 大言を吐きて、だますこと。妄誕 荒誕 虚誕。

【あし】 惡

善の意と相反す。例 凶惡 醜惡 險惡 好惡 美惡。

吉の意と相反す。「イマ／＼シキ」意。凶惡 凶器 凶險。

形状の見苦しきこと。妍の意と相反す。例 醜穢 醜惡 美醜。

心のあしきをいふ。淑の意と相反す。例 姦惡 邪惡 妖惡 讒惡。

足 脚

腰より下の總稱。

足のはぎなり。坐する時、うしろへ却くる故に名づく。然れども、兩足とも、兩脚ともいひて通用す。但し、手足とはいへど、手脚とはいはず。

日 晨 朝

太陽の地平線を離れたる時。例 平旦 旦夕 詰旦。

太陽の動き出でたる頃にて、旦よりも早き時刻。例 牝雞晨を告ぐ。清晨 詰晨 霜晨。

夜の明けはなれて、太陽を仰ぎ見るの意。旦よりは遅き時刻とす。例 朝夕 一

【あした】 朝 晨 旦

夜の明けはなれて、太陽を仰ぎ見るの意。旦よりは遅き時刻とす。例 朝夕 一

【あだ】

朝一夕。朝暮。

仇 讐 寇 怨敵の人を指す。例 仇敵。復仇。

言語の上にて相怨むるに至り、互に説破して快とする意あり。例 讐敵。

手配をして押寄する敵人の稱。例 外寇。寇賊。

【あだかも】

恰 宛

よく物の合ふことにて、「シツクリ」と譯す。例 恰富。恰、好し。

恰に似て、其意緩し。「サナガラ」と譯す。例 宛然。

【あたたかし】

暖 温 暄 煖 煦

寒からず、暑からず、氣候の人身に適する意。例 暖氣。暖風。冬暖。

水の熱度の、高からず、低からざる、ぬるま湯をいふ。例 温泉。温湯。温暖。轉

じて穩かなる性質の人にもいふ。温順。温和。温良。

氣候のあたゝかなるをいふ。三四月頃の氣候。例 暄暖。暄温。

物をあたゝむる意。例 煖爐。林間に酒を煖む。輕煖。

煦

日光のために、あたゝかになることにも、氣息にて、あたゝむることにもいふ。

【あたる】

中 當 方 直 丁

矢の的に中るが如く、目的の物に適中する意。例 暑氣に中る。瘴癘の氣に中

る。百發百中。中毒的の中。

當は正面にあたる意にて、兩者相適ひて優劣なきこと。例 天下能く當るもの

なし。相當。適當。正當。恰當。至當。擔當。當初。當年。當局。

事にさしあたりて、其時、丁度の意。時刻に關する辭。例 此時に方り。方今。

相當の義。例 夜に直りて圍を潰す。四十萬に直る。

恰もそこへ行當る意。例 父の憂に丁る。父母の喪に丁る。

【あづかる】

預 與 干 關

參預するにて、その仲間となる意。例 國事に預る。預金。

預と音義共に同じ。

「ヲカス」とも「モトム」ともよむ字にて、己よりさし出で、其事に關係する

【あなざる】

踪跡より、其意の確ならぬをいふ。例 失踪 踪跡
踪に同じ。例 奇蹤 遺蹤

侮慢 易

心中に人を輕んずること。例 輕侮 侮蔑 侮慢 輕侮
言語動作の上に出して、人を輕んずる意。例 暴慢 慢罵 驕慢 倨慢 侮慢
人を心やすきものにあひしらひて、敬意なきもの。

【あはく】

發 訶

掩へるものを取去りて、下の物を露はすこと。又、かくれたるもの、埋れたるものを明にするにもいふ。例 幽光を發く。塵粟を發く。惡左府の墓を發く。
人の陰事をいひあらはして、公にすること。多くは惡事を摘出するにいふ。

訶 併

【あはす】

併 戮 配 合

一つによせあはす意。例 合併 併合
力をあはす意。例 戮力

【あはれむ】

配 合

二つをとりあはす意。例 配合 配劑
混合し又は續ぎ合せて、一つの物とする意。合一 合同 合糾
「イツクシム」、又は「イトシク」思ふなどの意にて、可愛く思ふことなり。例 花月を憐む。愛憐

憐 憫

「フビン」に思ふ意。例 民を憫む。憫然 憫察 憫笑

憫 哀

かなしきほど「フビン」に思ふ意。されば憫よりはその意強し。例 士を哀む。

哀 矜

哀矜 哀痛

矜 恤

かなしみ、あはれむ意にて、憫よりも其意深し。例 哀矜

恤 憐

長上の人、下々の者をあはれむことにて、「目ヲカケル」意。例 愛恤 撫恤 賑恤

憫と同字なり。

【あはれむ】

遇 遭

遇 逢 遭 值 會 合

偶然に出であふことにて、ふと行きあふ意。例 奇遇 遭遇

【あやまり】

危殆キタイ。岌々キツク乎コとして殆アヤフいかな。
誤ゴ謬ミウ過クワ愆ケン錯サク訛クワ

心ならずして「シソコナフ」意。例 誤認ゴニン。誤解ゴカイ。誤診ゴシン。

織物の糸筋イトスヂの違へる意より轉じて、筋途スヂミチの取違ひにいふ。例 毫釐ガウリンの差サ、千里センリの謬ミウとなる。謬見ミウケン。謬察ミウサツ。謬說ミウセツ。繆ミウとかくも同字なり。

惡意オウイなくして、思はずも犯せる惡事アクジをいふ。例 過アヤマちては改アラタむるに憚ハヤカること勿ナカれ。過失クワシツ。過は他動詞にて、「アヤマツ」なり。名詞メイシの時はアヤマチなり。

心得違ひにて、過アヤマよりも其意ヘナハダ甚オモ重オモく、罪愆サイケンと連用して、殆キツク罪サイとなるべきほどのあやまちなり。例 三思サンシして愆ケンを顧カみる。愆ケンは過クワと同じく、「アヤマツ」。

「アヤマチ」にて、「アヤマリ」、「アヤマル」に非ず。

彼カレと此コレと入り違ひて、相合アヒアはぬ意。例 錯雜サクザツ。錯亂サクラン。失錯シツサク。

習慣シヨクワンの如く、いつとなしにあやまり違へる意。旅リョを旋センとかき、犬ケンを大ダイとかき、從ジュウシを徒トとかくが如きは誤字ゴジといふべく、于ウを干カンとかき、未ミを末マツとかき、己キを已イとかくが如きは、訛クワジ字ジなり。例 訛言クワゴン。訛傳クワデン。

誤 謬 過 愆 錯 訛

【あらかじめ】

豫

豫ヨ逆ギャク。事コトに先サキちて早ハヤく謀ハカること。前マヘ以モツて用意ヨウイすること。例 君子ウレヒ患ウレヒを思オモひて豫アラカめ之ノを防ブクぐ。

逆

豫ヨに似ニて、少コトしく異イなり。豫ヨは平素ヘイスより、前マヘ以モツて用意ヨウイする事コトなれど、逆アムジは或事アルジ件ケンの來クるに臨リンみて、迎ムカへ度ハカることなり。

【あらし】

粗

粗ソ糲ライ略リヤク暴バウ。精セイ、密ミツの反對ハンタイ、吟味ギンミのあらくして、つまらぬこと。

略

手テざはりのあらしこと。例 糲糲ライライ。糲食ライシヨク。

暴

詳サイの反對ハンタイ、あらしといふ意。例 大略ダイリヤク。概略ガイリヤク。

改

改カイ革カク。改カイ。善惡ゼンアクトモ共に、「シナホシ」て新アラタにする意。例 過アヤマチを改カイむ。改正カイセイ。改名カイメイ。變改ヘンカイ。改革カイカク。この字義は、毛ウを去クりて製ツクせる「ナメシ皮カ」にて、根本ネモトより、「サラリ」とあられたむること。例 革命カクメイ。革新カクシン。改革カイカク。

改

【あらはる】 更 悛 見 現 顯 著 形 露 表 彰 旌

過惡を改むる意。例 悔悛。改悛。
 改に似て、度々代ふる意あり。例 更易。更代。更衣。變更。更新。
 見 現 顯 著 形 露 表 彰 旌 暴 覺
 隠れたるもの、出でたる意。例 隠れたるより見る、はなし。發見。見兵。隱見。
 見と意義共に同じく、目の前に見ゆるをいふ。例 現在。現今。
 隱微ならずして、光り見はるゝ意。例 顯達。貴顯。顯榮。
 明白に見ゆる意。「アラハル」、「アラハス」、「イチシルシ」など訓む。例 著述。著明。
 著作。顯著。著姓。
 隠れたるもの、出できて、形の見ゆる意。例 中に誠あれば、外に形る。形状。形體。形骸。
 掩蔽物を取りのけて、「ムキ出し」にする意。例 露出。暴露。露見。露臺。露店。
 裏の反對にて、裏にありしものを、表に出して見ゆる意。例 表出。表彰。意表。
 事物のあや、模様などの、明に外に見ゆる義。例 顯彰。彰明。表彰。彰著。
 道德工業の盛なる者を、諸人に知らしむること。「ハタ」とも訓む。もと「ハタ」

【あらふ】 暴 覺 洗 濯 滌 有 在 【あり】 有 在 【ある】 在 荒 蕪

を立て、功德を人に知らする義より轉用す。例 旌表。
 日にさらす義。暴露とは、晝は日に照され、夜は露にうたるゝをいふ。俗に外へ「サラゲダス」といふ意に轉用す。
 今迄氣付かざりしことに、始めて心付きたること。例 發覺。
 洗 濯 滌
 水にて清むること。
 あかをとること。例 滄浪の水清まば以て我纓を濯ふべし。
 あらひながすこと。
 有 在
 無の反對。何々「ガアル」の意。例 こゝに人有り。甚、盛名有り。有力。有名。有爲。有罪。有數。有志。
 存在の意にて、何々「ニアル」といふ事。物體の在る場所を指す字なり。例 弟妹家に在り。在留。在郷。在位。在天之靈。
 荒 蕪

荒 蕪

田地を耕作せずして、打棄ておくこと。例 荒蕪 荒廢 荒涼
草の生ひ茂ること。例 春蕪 青蕪 平蕪

いの部

【いかに】

如何

如何 何如 奈何 若何 (イカニともイ)

語氣緊しく、「イカガナルワケアルカ」といふ如き詰問の意あり。例 五十歩を以て、百歩を笑はば則ち如何。敢て問ふ、國君、君子を養はんとせば、如何にせば養ふといふべきか。

何如

語氣較緩し。「イカガデアラウ」、「イカガシヤウ」など、緩やかに問ひかくる意あり。例 徳、何如なれば則ち以て王たるべきか。取らざれば必ず天の殃あらむ、如何せむ。來年を待ちて然る後に已めば如何。

奈何

奈は如何の二音の合したる者にて、一字にて如何の意あり。故に一字の用例も多し。奈何は如何よりも意輕し。

若何

若は如と通用す。如何よりは其意輕し。

【いかた】

筏

筏バツツ 竹木を編みて、舟の代りに水に浮ぶるもの。例 我筑水を下つて舟筏を楫ふ。

【いかる】

怒

怒ド 腹立つこと、普通用ゐられて用法廣し。例 怒氣 怒髮 震怒 赫怒

憤

憤フン 心中に鬱積せる怒の、外に發せるをいふ。例 鬱憤 憤怒 憤懣 憤激 發憤

恚

恚シ 恨怒すること。忌々しく思ふ。くやしがる等の意。例 憤恚 瞋恚

愠

愠オン 心中に、むっとすることにて、怒より輕し。例 人知らざれども愠らず、亦君子ならずや。

忿

忿フン 心中に恨怒すること。實に腹だしいことぢや、の意。例 忿怒 忿恚 忿々

瞋

瞋セン 盛怒の氣色に見ゆること。

生

生セイ 死の反對にて、呼吸せる限は生と稱すべきにて、動靜の如何に關せざるなり。

例 生氣 生靈 生年百に満たす。

【くわく】活

活動にて、生きて運動する意。例 活潑 活眼。

【ぐんし】軍師

支那上世に於て、一萬二千五百人の稱。今は、軍陣、軍隊、軍卒等の意に用ゐる。支那上世に、二萬五千人の稱にて、軍の倍數なり。今は、師旅、師團、軍師等の意に用ゐる。

【そそい】息

息、憩、休

息をつぐこと。氣をやすむること。例 休息、安息。

途中小やすみすること。息よりも時間長し。例 休憩。

仕事又は務のやむこと。例 休日、休暇、休職、萬事休す。

【けつじやく】潔

汚穢の反對にて、物質の上にも、精神の上にも用ゐらる。例 不潔、潔白、淨潔、潔癖。

屑

氣のすゝむこと。こゝろよしとすること。例 就くを屑しとせず。降るを屑しとせず。伍するを屑しとせず。

【くせき】績

績、勳、功

事業の成就せる者をいふ。例 三載績を考ふ。成績。

功の成就して、身に光彩ある意。例 偉勳、勳績、勳功、勳威。

思ふ通りに成就せる意。例 功勞、功力、偉功。

【いそがは】忙

忙、急

閑の反對にて、用事多く、隙なきこと。例 多忙、繁忙。

いそがはしく落付かぬ意。例 忽々頓首、行李忽々、一々、拜趨するを得ず。

緩の反對「セハシ」と譯す。追ひ付かんとして、たるまず、せはしき意。例 性急。

【うかへ】抱

抱、懷、擁

手にてかゝへ持つ意。例 抱持、抱負。

ふところに入るゝこと。心に思ひこめてをること。例 本懷、述懷、懷抱、懷恨。

周圍をいできて内にすること。例 擁護、大牙を擁す。擁書萬卷、衾を擁して眠る。山川擁塞す。

【いたす】

致チ輸シュ

或一定の場所まで、物を届トくこと。例書を致す。語を致す。送致。引致。誘致。郵致。

輸

舟車などにて、物を運搬しやること。例輸出。輸入。輸送。輸贏。今日は輸の音をユと誤り呼ぶ習慣となりたれば、習慣に従ふも妨げなし。

【いたむ】

悼トウ痛ツウ傷ツウ戚セキ傷ツウ

人の死を、いたみなげくこと。例哀悼。痛悼。追悼。悼惜。身體の痛むより、總べて事物の切なるに轉用す。例痛切。痛快。痛歎。痛恨。痛惜。悲痛。

傷

身に傷のあるが如く、痛切に悲むこと。例哀傷。悲傷。毀傷。喜の反對にて、憂へいたむ意。例哀戚。憂戚。

傷

悲しく、むごさいさまをいふ。例慘酷。慘烈。慘害。慘愴。心の底まで悲しく感ずること。例悽愴。感愴。愴に同じ。例悽愴。悽愴。

愴

【いたむ】

悵テイ至シ到トウ

残念に思ふ、本意なく思ふ、などの意。例悵然。悵々。悵悵。悵悵。

悵

至シ到トウ詣ケイ造ゾウ抵テイ臻ゼン

行き著くこと、及ぶこと、極點のこと、等に用ゐる。例朝より暮に至る。米艦將に至らんとす。冬至。至誠。至善。至極。至尊。

到

達し著くこと。此處より彼處にいたり。彼處より此處にいたるにいふ。例到著。到來。懇到。精神一到。人間到る處青山あり。

詣

伺候の意ありて、此處より彼處に行くこと。例參詣。長安に詣る。公府に詣る。その意詣に同じけれど、彼處より此處に来ることに用ゐる。例四方の賓客皆造る。有衆咸造る。

造

至シに同じけれど、これは、往來の意に用ゐる。例江戸より長崎に抵る。聚り至る意。例敵兵荐に臻る。子孫皆臻る。萬福臻る。

抵

偽ギ詐サ伴バン譎ケツ詭キ誕タン

誠又は眞の反對。例虛偽。偽作。偽朝。偽造。詐偽。誠實の反對。人を欺き虚言を吐くこと。偽よりは輕し。例巧詐は拙誠に如か。

詐

誠又は眞の反對。例虛偽。偽作。偽朝。偽造。詐偽。誠實の反對。人を欺き虚言を吐くこと。偽よりは輕し。例巧詐は拙誠に如か。

偽

伴 譎 詭 誕 安 焉 惡 糸

ず、詐術、權詐、詐謀。

いつはりて眞似すること。例 伴りて狂となる。伴り死す。

思慮を廻らして、いつはり欺くこと。例 譎計、譎詐、欺譎。

譎に同じ。例 詭計、詭詐、詭辯。

事實よりも大きくいふこと。例 荒誕、虚誕、妄誕。

安 焉 惡

いかにして、之で安心が出来やうか、できぬの意。例 泰山崩れば吾安ぞ仰がん。

どうして、そのやうにしやうか、しはせぬと反語に用ゐる。相手をおきて論

する意あり。例 父子を殺す、焉ぞ慈ならん。父戮子居、君焉用之、左傳。

ドウシテの意、先方を輕蔑していふに用ゐる。例 爾未學ばず、惡ぞ國家の

大事に任せん。

糸 絲

細さいと(絲よりも)なり。世に絲と同様に用ゐれども、誤なり。絲は音「シ」、トと訓じて、糸は音「ベキ」ホソイトと訓すれば、全く別字なり。但し、糸も、絲

絲

幼 稚 嬰 孩 違 暇 閒

も、蠶の吐き出したるものにて、其一筋のいとを忽といひ、五忽即ち五筋を集めたるいとを糸といひ、十忽を集めたるいとを絲といふ。此にてその別を知るべし。糸は細糸、絲はいと類の大小通じて用ゐると心得ても可ならむ。

糸の條を看よ。

幼 稚 嬰 孩

十九歳までをいふ。

十歳前後の小兒をいふ。例 嬰兒。

みどりごととて、四五歳までの子供をいふ。例 孩提の童。

違 暇 閒

他のことまでは、手のとゝかぬ意。例 枚擧に違あらず。我身だに閱せられず、

我後を恤ふるに違あらんや。

仕事のなくて、ひまなること。例 休暇、人をして應接に暇あらざらしむ。

つれづれなるばかり、ひまなるをいふ。例 閒暇、閒居。

【いぬ】

寝寐

臥床に就くこと。例 就寝。臥寝。よくねいること。

【いぬ】

祈禱

或時に當りて祈るに用ゐる。例 雨を祈る。霽を祈る。平生禱る意。例 丘の禱ること久し、と論語にある類なり。

【いぬ】

祝賀

現在より行末かけて、祝ひ祈る意。例 祝詞。祝儀。祝言。祝文。祝賀。吉事に對して、喜びを述ぶること。例 賀狀。年賀。慶賀。賀客。

【いぬ】

況矧

「マシテ」と譯す。字書に滋也盛也と註せり。況に同じ。

【いぬ】

曰 謂云 言 道

言語を發すること、又、言語を直寫するに用ゐる。或は、物の名、及び物を數へ

謂

云

言

道

家宅

あぐる時にも用ゐる。例 孔子曰 孟子曰 詩曰 曰仁 曰義

思ふことを直ちに、口述すること。又物に名づくるにも、人に話しかくるにもいふ。例 殘賊の人之を一夫と謂ふ。子顔淵に謂うて曰く。博愛を之れ仁と謂ふ。誠より明なる之を性と謂ふ。

曰に似て稍や輕し。又某がかくいへりと過去のことにも用ゐる。又文句の終に用ゐることあるは、云々の意にして語を畧せるなり。例 牢曰く子云く吾試みられず、故に藝。余嘉靖の閑獵の令たりと云ふ。

自己のいふことを主として、相手に重きをおかぬをいふ。例 與に仁義を言ふ。顔淵は善く德行を言ふ。我考へを筋道を立て、述ぶること。例 切るが如く磋くが如き者を學と道ふ。

唱道。報道。道破。家宅 屋 舍

廣く建物の稱とす。例 家内。家産。家門。家庭。住處のことにも、土地のことにもいふ。例 邸宅。居宅。宅地稅。五畝の宅。

屋

屋根の意より轉じて、如何なる家にも通じて屋と稱す。例馬屋、葦屋、書屋

酒屋、金屋、白屋、板屋。

休息所、多くの人の宿する所の意に用ゐる。例旅舎、客舎、學舎、寄宿舎。

舎

小き草葺の家をいふ。例草庵、禪庵。

小き家の稱。例蝸廬、舊廬、草廬、穹廬。

【いほむ】

戒 誠 警 箴

前以て堅くあやまらぬやう注意させおくこと。例之を戒むること色にあり。

主人賓を戒む。

戒と通用すれども、多くは自動詞として用ゐる。例前車の覆へるは後車の誠

め。

戒よりも強し。驚かして用心せしむる意。例降水余を警む。職事を警む。警察

警備。警固。

針の正字なり。針を以て病を治するより轉じて、人の不善をいましめ改めし

【いむ】

忌 諱

嫌疑と熟して、憎みきらふをいふ。例禁忌、忌中。

差合を避け憚かる意。例忌諱に觸る。君の惡を諱む。尊者のために諱む。死を

諱む。

【いむ】

賤 卑 鄙 陋

貴の反對。物價の安きより轉じて、下等なるにいふ。例賤業、賤妾、賤劣、下賤

尊の反對。尊敬すべからざる者の稱。貴賤は、身分等級の上の區別なれども、尊

卑は人格の上より區別せること。爵位官祿高くとも、德行なければ、卑といふ

べし。例卑劣、卑近、卑見、卑下。

都に對する語。田舎めきて粗野なるにいふ。例鄙人、鄙吝、鄙野、邊鄙。

土地の狭き意より轉じて、動作、拙劣、心事の狭小なるをいふ。例孤陋、固陋、

陋巷、陋習、陋屋、拙陋。

【いゆ】

癒 瘥 瘥

病の日毎に快くなりゆくをいふ。

病の軽快となれるをいふ。

病の全くいえたるをいふ。

【いよいよ】

愈 彌

漸次に一つ／＼増進する意。増減共に用ゐる。

増益、減少共に用ゐること。畧愈に同じ。

【いる】

入 納 容

出の反對。外部より内部に進入すること。例 出入。入國。入内。入京。

出すの反對。物を受けいる、義。例 收納。出納。受納。

器物の中に物をいる、こと。例 容積。内容。

う の 部

【う】

得 獲

【う】

獲得

失の反對にて、なき物を手に入る、意。例 得失。利得。得意。

もと禽獸を、捕獲するより轉じて、首尾よく手に入る、にいふ。得よりもその意甚重し。例 獲麟。收獲。

植 種 栽 樹 藝

倒れぬやうに、うる立つる意。例 扶植。培植。植樹。植字。

種子を蒔きて、植うること。例 播種。

若木をうるつけて、手入れする意。例 栽培。栽植。

樹木をうるたつる意。例 五畝の宅之に樹うるに桑を以てす。樹立。

小苗をうるつくるにも、又は善く培ふにもいふ。例 藝園。種藝。

饑 飢 饑 餓

下の飢と饑と共に、凶作にて、食物のなき意。空腹の意にはあらず。饑は五穀

の内に、二穀の凶作なるをいふ。

畧饑に同じ。されど饑は饑饉と連用して、全く凶年の意なれど、飢は飢渴と連用して、時としては、人の食を得ざることある意。

饑 饑

五穀の内にて、三穀の凶作なるをいふ故に饑よりも其意重し。
空腹の極度にして、食物を食ふ力もなきやうになりたるをいふ。故に餓死、餓
孿などいふ也。

餒

空腹となりて、「ヒモジサ」堪へぬ意。

窺

窺伺候 偵 謀 窺
のぞき見る事。 窺管中より物を窺ふ。窺測。

伺

ひそかに様子を見る意。又訪問の敬語とす。 伺候。窺伺。

候

事の成行をはかる意にて、測候所などは、天氣の變化をはかることなり。又、
訪問の敬語ともなす。 伺候これなり。

偵

ひそかに様子を視察する意。 偵察 探偵。

謀

間者を入れて、様子を探ぐる事。 開謀 謀者。

穿

穿鑿
ほりぬく意。 穿鑿。

鑿

金属類を以て、ほる意。「ホリコム」といふに當る。 開鑿。

受承稟

受 承 稟 享
物を受け入る意。 天の祐を受く。 受納。授受。傳受。
下にありて、上の物をうくる意。 恩を承く。 承露盤。了承。承諾。承知。
受到似て、受納の義とす。 神佛の供物をうくるには、必、享の字を用ゐる。 例
福を享く。 年を享く。 祭れば則ち鬼之を享く。 魂彷彿として來り享けよ。
上命をうくるにも、天授のものを用くるにもいひて、 略受と同じけれど物を
受くるには用ゐず。 天稟の才。 稟性。 稟賦。 稟受。

稟

動 搖 撼
靜の反對にて、自動詞にも他動詞にも、大小輕重共に甚廣く用ゐらる。 動
物。 動止。 反動。 舉動。 鳴動。 震動。 行動。 動亂。
定の反對にて、ゆらくとうごく意。 又、心の落ちつかぬ意。 動搖。 搖落。 群
心搖く。 中心搖々。

動

「ウゴカス」と他動詞によむ。「ユスブル」「ユスル」等の意。 虺蜺大樹を撼す。
天地を撼す。

撼

三三

【うしなふ】

失 喪 亡

得の反對にて、取り失ふ意。又、「シツコナフ」意にも用ゐる。例 時なるかな失ふべからず。過失。失敗。失策。失意。失敬。失徳。事物の見えずなりて、二度取返しがつき意。例 親を喪ふ。子を喪ふ。喪家の犬喪心。

亡

ほろびうせて、原物の片影をも認むる能はざるに用ゐる。例 滅亡。死亡。亡國。亡命。未亡人。

【うすし】

薄 菲

厚の反對にて徳少きにも用ゐる。例 薄徳。薄弱。薄祿。野菜の粗悪なるものをいふ。轉じては、厚からざる薄の意に用ゐる。例 飲食を菲くして、孝を鬼神に致す。菲薄。菲才。

【うたふ】

歌 謠 謳 唄

聲を長くし、節をつけてうたふ意。樂器に合すにも、合せざるにもいふ。流行歌をいふ。世間一般にうたふ意あり。例 謠曲。歌謠。

謳 唄

長き歌の一節をうたふ意。又、鼻歌をうたふにも用ゐる。例 謳歌。うたひ唱ふること。佛教の經文を唱へ、和讃をうたふをいふ。例 内道場を作り、晝夜梵唄す。

【うち】

中 内 裏

まんなかの意。例 中央。中國。中正。外の反對 場所又は物のうちがはの意。中央も、四方の隅も皆内に含まるゆるに、中よりは、範圍廣し。例 内國。内地。家内。境内。界内。表の反對。衣服の表裏の意より、人目に立つ公のことを表といひ、人目に隠れたることを裏といふ。例 裏面。

【う】

伐 討 征 打 擊 撲 拍 搏 撻 毆

罪を聲してうつこと。師に鐘鼓あるを、伐といひ、無きを侵といふと左傳に見ゆ。又木をきるにも用ゐる。例 征伐。討伐。伐木。伐採。敵の罪科をいひたて、討つをいふ。例 天有罪を討つ。天子諸侯の罪を正しうつことにて、上より下の順はざるをうつ意。例 征討。

討 伐

打撃 撲 拍 搏 撻 毆 踞 蹲

征伐、征夷將軍、征韓、征露。
 器を以て物をうつ意。その用法廣くして輕し。例 打撲、毆打、打破、打診、打撃、強くうつ意。打破くことにも、打破ることにも、打殺すことにも用ゐる。例 擊退、擊殺、擊破、突擊、擊木、擊石、擊仇。
 小擊の意、輕くほと／＼とうつをいふ。例 螢を撲つ、雪衣を撲つ、香鼻を撲つ、撲盡、相撲。
 手のひらにてうつにも、拍子木をうつにも用ゐる。例 拍手。
 手に力を入れてうつ意。例 虎を搏つ、搏擊。
 杖にてうつなり。「ムチウツ」と訓む。例 鞭撻。
 鉦鼓をうつにいふ。
 杖にて人をうつをいふ。
 蹲、踞、獸のつくばふやうに、手をつきてをること。例 鳳蹲、虎蹲。
 腰をすゑて、そり反りをること。例 牀に踞す、石に踞す。

【うつす】 移 遷 徙 寫 摹 描 瞻 【うつむ】

移、遷、徙、寫、摹、描、瞻、(自動詞の時はウツス) 他動詞の時はウツス
 場所をかふる意。自他共に用ゐる。例 移植、河内凶なれば、則ち其民を河東に移す。世變り風移る。移轉、移文、移住。
 上より下、下より上にも、下より上にも、高きより低きに、低きより高きにもうつるにも、用ゐらる。例 幽谷より出で、喬木に遷る。孟母三遷の教。左遷、遷都。
 物避けて、立ちのく意あり。「ウツサル」と他動によむ時あり。例 義を聞きて徙ること能はず。
 かさうつす意。例 寫生、瞻寫、寫字、寫眞。
 物の形を似せうつす意。例 摹倣、摹寫。
 畫をうつすこと。それより文章に景情をかきあらはすにも用ゐる。例 描寫、描畫、描摹。
 うつしとる意。説文に移寫の謂ひなりと見ゆ。
 埋瘞、填湮

埋瘞填湮 俯 俛 畝 疇 奪 篡

土を上におほひかぶすこと。例埋瘞。埋没。埋に同じ。

物のあきたる處をふさぐこと。例填塞。充填。うめつぶすこと。例木を刊り、井を湮む。湮滅。

俯 俛 俯よりはなほ一層低く首をさぐること。例俯瞰。俯伏して命を聞く。俯視。

畝 疇 俯よりはなほ一層低く首をさぐること。司馬法にては、六尺を歩とし、百歩を畝とす。又、秦は二百四十歩を畝とす。

奪 篡 田のうねの次第くに並びたるをいふ。例田疇。平疇。荒疇。瓜疇。奪。篡。褫。

與の反對。強ひて取る意。例強奪。奪取。奪掠。逆に取る意。下より上のものを奪取することにて、多くは國を奪ひ、天子の位

褫 海 瀛 卜 筮 怨

を奪ふなどに用ゐる。例篡弑。篡位。篡賊。衣服を剝ぎとること。轉じては、與へたるものを取りあぐることに用ゐる。例動位褫奪。

海 洋 瀛 水の鹹味ある處をいふ。大なる海、又そとうみのこと。例大瀛海ありて其外を環る。

卜 筮 占 龜を灼きて、其のひわれの模様を見て吉凶を定むること。例卜居。卜宅。著を以て吉凶を考へ定むること。後には竹を削りても用ゐる。例筮仕。筮竹。

兆を視て問ふこと、兆とは灼きたる龜のひわれの模様をいひ、其模様を見て吉凶を問ふを占といふ。怨 恨 憾 對 怨の反對。恚、恨、讎等の意を有す。例仇怨。怨憤。私怨。

恨

悲^{イカ}り仇^{アゲ}とすることの深^{フカ}き意^イ。又、残り多く、殘念^{ゼンネン}に思^{オモ}ふ意^イあり。〔史記^{シキ}に、王^{ワウ}朔^{サク}李^リ廣^{クワウ}に謂^{イハ}ひて曰^{イハ}く、將軍自ら念^{オモ}ふに、豈^{アミカク}嘗^ツて恨^{ウラ}むる所あるか、廣曰^{クワウイハク}く、卷^{ケン}降^{カウ}る者八百餘人。吾^{ワレ}詐^{イツ}りて盡^{コト}く之^{コト}を殺^{コロ}せり、今に至^{イタ}りて大^{イタ}に恨^{ウラ}むと。悔^{クワイ}恨^{コン}。恨^{ウラ}。遺^キ恨^{カン}。

恨と同じく、悔^{クワイ}恨^{コン}の意に用^{ヨウ}ゐられるれど、其意淺^{アサ}し。〔遺^キ憾^{カン}。

互^{ウタ}に怨^{ウラ}み合^アふ意^イ。

懣 憾 賣 售 沽 買

廣^{ヒロ}く「アキナヒ」、「ウル」事^{コト}に用^{ヨウ}ゐる。又、私利^{シリ}を謀^{マカ}りて、友^{トモ}を欺^{アサム}き或^モは國^{クニ}の不利^{フリス}を顧^{カミ}みざることにも用^{ヨウ}ゐる。〔商^{シヤウ}賣^{バイ}。賣^{バイ}買^{バイ}。友^{トモ}を賣^ウる。賣^{バイ}國^{クニ}奴^ヌ。

賣^ウりて既^{スデ}に我手^{ワガテ}を離^{ハナ}れ去^サり、他人^{タニ}の所有^{ショウヨウ}となりたるにいふ。

小賣^{コウリ}小買^{コウバイ}をするにいふ。「ウル」と「カフ」と、兩様^{リウヤウ}に用^{ヨウ}ゐる。

店^{テイ}にてうるること。行^ユきて賣^ウるを商^{シヤウ}といひ、坐^ザして賣^ウるを買^{バイ}といふ。

美 麗 妍 娟 艶 妖

美^ビ麗^{レイ}。妍^{ケン}。娟^{ケン}。艶^{エン}。妖^{ヨウ}。悪^{アク}又は醜^{ウツクシ}の反對^{タイゴウ}。よし、うるはし、うまし、などともいひて、愛賞^{アイショウ}の意^イあり。〔

美人^{ビジン}。美玉^{ビギョク}。美服^{ビフク}。美名^{ビメイ}。

專^{モツ}ら形色^{シキシヨク}のうるはしきをいへるにて、はでにする意^イあり。〔華麗^{カワレイ}佳麗^{カレイ}麗人^{レイジン}。

うるはし、うつくし、かはよし、みめよし、などいふ意^イにて、醜^{ウツクシ}の反對^{タイゴウ}。美^ビの字^ジに

近^{チカ}けれど、才德^{サイトク}事業^{ジギヤウ}の事^{コト}には用^{ヨウ}ゐる。

「ウルハシ」、「カホヨシ」、「シメヨシ」など、も訓^{クニ}む。女色^{メシヨク}より景色^{カシキ}の事^{コト}に移^ヒして

用^{ヨウ}ゐることあり。〔嬋娟^{センケン}。娟々^{ケンケン}。蝴蝶^{コウテ}過^カ。閑慢^{カンマン}。杜詩^{トシ}。

うるはし、うつくし、やさし、などいふに當^アる。美色^{ビシヨク}の發揚^{ハツヤウ}する意^イありて、人^{ヒト}の

心目^{シンモク}を奪^{ウバ}ふが如^ニき美麗^{ビレイ}の人の事^{コト}に用^{ヨウ}ゐる。〔妖艶^{ヨウエン}。嬌艶^{ケウエン}。艶妻^{エンサイ}。又^{マタ}艶^{エン}と書^カくも

同字^{ドウジ}也^{ナリ}。

うるはし、うつくしと譯^{トク}す。巧媚^{カウミ}、艶^{エン}の三義^{サンギ}を兼^カね、女色^{メシヨク}又は花^{ハナ}のことに用^{ヨウ}ゐる。

濕^{シツ}。潤^{ジュン}。濡^{ジュ}。霑^{テン}。澤^{タク}。

乾^{カン}の反對^{タイゴウ}。シメル意^イ。〔濕氣^{シツキ}。

燥^{サウ}の反對^{タイゴウ}。うるはひて光澤^{クワウタク}のある意^イ。〔富^{トミ}は屋^{ウキ}を潤^{ウルホ}し、德^{トク}は身^ミを潤^{ウルホ}す。河九里^{カクウリ}を潤^{ウルホ}す。溫潤^{ウンジュン}。

麗 妍 娟 艶 妖 濕 潤

【うるはし】

濡

滴るほどにぬるゝ意。

物を總體にしめらす意。「沾」と書くも通用す。例 涙巾を濡す。汗背を濡す。濡

被。霑染。均霑。

澤

潤よりも、甚しく、潤す意。之より轉じて、うるほひて、つやのあるにもいふ。

例 潤澤。光澤。滑澤。恩澤。德澤。

【うれふ】

憂 愁 患 恤

心中に苦勞すること。事の起るに先ちて、心配する意あり。又、内部に對して

うれふるに用ゐる。例 内憂。杞憂。憂慮。

思ふことありて、心の浮き立たぬ意。例 客愁。旅愁。憂愁。

災にあひて、現在其事を苦にせるにいふ。又外部に對してうれふるに用ゐる。

憂は心を主とし、患は事を主とす。例 外患。災患。患難。患苦。

「アハレム」とも訓みて、「フビン」に思ふ意。例 患難相恤ふ。

えの部

【えらぶ】

撰 選 簡 擇

善言を撰びて記述すること。即ち、撰述の意にて、碑文若しくは著述などに謹

撰など、書す。例 撰著。撰文。

多数中よりえり分けて、ぬき出すこと。文選。唐詩選などいふも、多くの詩文

中より、其粹を抜ける意なり。例 選舉。選出。選拔。選手。選科。

悪を除き、善を抜き取る意にて、選よりは弱し。例 車馬を簡ぶ。簡閱。

善悪をえり分くる意。例 擇びて仁に處らず。焉ぞ知を得ん。善を擇びて固く

之を執る。擇言。擇行。

畫 繪 圖 描

物の形狀を寫せるもの、彩色の有無に關せず。例 人物畫。墨畫。

彩色せる畫をいふ。元來は、色々の絲にて縫模様を作れるものゝことなり。

例 彩色繪。油繪。錦繪。水彩繪（水彩畫といふはわろし）。

事物の形態を、現實に、正しく寫せるもの。故に圖は實物通りを主とし、畫は

實際に加ふるに、多少の想像を加へたるもの。例 地圖。系圖。圖面。見取圖。

描

うつす意。(うつすの條を看よ) 例 描寫

おのの部

【おきな】

翁 叟

叟

婆の對稱にて、年よりたる男のこと。

老人をいへど、先生といふが如き敬稱にも用ゐる。例 叟千里を遠しとせずして來る。

【おく】

置 措

置

物を或場所にするおくことにて、在らしむ、居らしむ等の意。例 留置場。物置場所。

措

手を離して下に置くこと。又は棄ておく意。例 舉措之を思つて措くこと能はず。刑措いて用ゐず。

【おくる】

送 贈

送

迎に對して、人の去るを送る意。例 送別。送致。送付。

送 贈 餽 饋 貽 遺 餼 贈 呈

贈

人に物を與ふること。増の字の意ありて、此方よりおくりて、先方の物を増

餽

加せしむる意あり。例 贈位。贈呈。

饋

食物をおくる意。例 饋食。饋餉。

遺

おくりて先方へ殘し留むる意。例 師説を作りて之を貽る。

餼

物品を先方に置き來る意。與へられたる人より見れば、留め置かれたるもの

贖

故に、其の意の熟語最も多し。例 遺訓。遺言。遺物。遺業。遺烈。遺産。

【おこなふ】

行 將

行

旅行に出發する人に「ハナムタ」をおくること。例 餞別。

【おこる】

興 起 作

とりあつかふこと。例 用ゐれば則ち行ひ、舍つれば則ち藏る。

興 起 作

増大する、盛大となる、衰へつゝある者が反りて盛になる等の意あり。例復興、興隆、中興、再興、勃興、伏したるもの、おきあがること。例王者起るあらば必來りて法を取らん。聖人復起るとも吾言を易へじ。起伏、起臥、起居、勃起、事物の出来始むることにて、即ち漸々に成立する意あり。例天油然として雲を作す。聖人の道衰へて、暴君之に代りて作る。聖王作らずして、諸侯放恣なり。

【おこそか】

莊 嚴 儼 儼

上より下に臨む時の敬ふべき姿。威儀容貌を屹度けたかくすること。例莊敬、莊重、莊嚴、莊の如く威儀容貌の上にも、政事、法會等の形容にも用ゐる。例嚴肅、嚴明、嚴厲、威儀の莊嚴なる貌。政事法令等の上用ゐることなし。

【おす】

推 押 壓 擠 捺

おしやる意。又推敵などいふ時は、詩句を鍛鍊すること也。例門を推す、戸を推す、推舉、推戴、推究、上よりおしつくること。又、おさふること。例押送、押署、上よりおしつけて、おしすくむる意。例鎮壓、壓制、壓迫、壓力、抑壓、壓倒、おしおとす意。例排擠、陷擠、手に力をこめて押しつくる意。例捺印、押捺、遅 晏 晚

【おそし】

遅

速の反對にて、らちのあかぬこと。例遅刻、遅延、春日遅々たり。兵は拙速を貴ぶ、巧遅を聞かず。

晏

日のくれかゝること。

【おそる】

恐

日のくれかゝること。又事の早くはこばぬこと。例大器晚成、恐 懼 畏 怖 怕 惶 懾 悚 摺 惴 惴 將來を憂慮すること。恐くは成立せじなどの時は、將來を氣遣ふ助語なり。例恐惶、恐縮、恐怖

畏懼

差しあたりて、實地におそるゝこと。「惧」の字も同じ。
甚しくおそるゝ意にて、恐懼よりも深し。謹慎又は服従の意を含む。例 大に民心を畏れしむ。君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。畏敬。畏友。畏服。

怖

「オドス」、「コハガラス」等の意。例 巫祝鬼神に依託して、愚民を詐り怖れしむ。汝怖るゝ勿れ、死は命なり。驚怖。恐怖。

懼に同じ。されど、恐の如く俗語に用ゐる。

「オソレ」、「アワテル」意。當惑の意もあり。例 惶惑。恐惶。驚惶。

臆病にて、震ひ慄ぐ意。例 小人は憂ふれば則ち挫けて懾る。懾伏。震懾。

おそれて體をすくめる意。例 悚手。悚然。

恐懼して志を失ふ意。氣の動轉して、分別のなくなる事。例 一府中皆懼伏す。

憂ひおそるゝこと。

【おの】 惴 惴 懼 懾 惶 怕 怖

落 墮 墜 隕 零

落

上より下に落つることにて。其意廣し。例 落馬。落花。落第。落膽。落命。落胤。落雷。陷落。暴落。

墮

「スベリオチル」、「オチクヅレル」等の意。例 涙を墮す。術中に墮つ。墮落。墮胎。

墜

落ちこむ意。又くづれ落つる意。例 星墜ちて木鳴る。祖宗の業墜つ。日月未だ地に墜ちず。

隕

高處より眞直に落つる意。例 星の隕つること雨の如し。世々其名を隕さず。隕石。

零

散り落つる、ふり落つる等の意。例 零露。零落。

【おの】 威 嚇 喝

勢を以ておしつくること。例 威服。威壓。威嚇。喝。威嚇。喝。威嚇。喝。威嚇。喝。

【おの】 喝 惕 嚇 威

氣をもますること。例 虚喝。惕に同じ。跳 踊 (踴) 躍

【おどろか】 躍 踊 踊 跳

【おふ】 逐 追 愕 駭 驚

一とびに飛びあがること。例 跳梁魚跳。小おどりをすること。例 喜踊、飛踊、拊踊。踊字は踊字の俗字なり。

飛び超ゆること。又唯飛上ることにも用ゐる。例 一躍、飛躍、踊躍、奮躍。驚、駭、愕 (自動詞の時にはオドロク、他動詞の時にはオドロカス)

意外の事にあひて、急に心の惑ふことにて、俗にいふ「ビツクリスル」意。例 莊公寤生して姜氏を驚かす。左傳、驚惶、驚怖、驚嘆、喫驚。

驚き起つ意にて、驚より強し。例 驚駭、震駭。周章狼狽の意にて、駭より更に重し。例 荆軻秦王を刺さんとす、秦王柱を環りて走る、群臣皆愕く、驚愕、錯愕、愕然。

追 逐 趁 趕

「オヒカケル」、「オヒツク」、「後ニツイテユク」等の意。例 追捕、追及、追撃、追懐、追迹、追究、追従、追慕。

「オヒハラフ」、「オヒマハス」等の意。追は「オヒカケ」捕ふる意あれど、逐は「オ

【おほいな】 趕 趁 大 巨

恢 碩 浩 洪 鉅 巨

「オホ」とも、「オホイナリ」とも、「オホイニ」とも訓む。大、大小の大的意にて、大と清音に讀む時は、少の反對にて尊稱となる。

細の反對にて、ふときことなり。多くは形状の上にいふ。例 巨人、巨室、巨材、巨萬。

巨と同字なり。恢、碩、浩、洪、鉅、恢、宏、鴻、偉。

織の反對。織は物の至細をいふなれば、これは盛大の意あり。例 洪水、盛大流行の貌。例 浩渺、浩漫。

肥大の意。例 碩學、碩儒、耆碩。ひろく大いなること。例 天網恢恢として、疎なれども漏さず。恢然、恢廓。

おの部 おほいなり

宏

大と廣との意を兼有す。例 宏智、宏辯、宏壯、宏麗。

鴻

仰山なる意。例 鴻生、鉅儒、鴻雁、鴻儒。

偉

きはだちて見ゆること。例 偉大、偉人、偉業、偉功、偉名。

【おほふ】

覆 蔽 掩 蓋 庇

上より「カブセル」こと。例 天覆地載、救覆、フクの音の時はクツガヘル意となる。

蔽

「オホヒカクス」こと、「ヒキマトメル」こと。例 隱蔽、詩三百一言以て之を蔽へば云々。

掩

遮り隠す意。例 掩護、不善を掩ふ、林に掩はれて陣す。

蓋

ふたをするやうにおほふ意。例 蓋世の勇。

庇

「カバヒ」、「オホフ」意。例 庇護、庇蔭、曲庇。

【おほむね】

概 率

オヨソ、ウチナラシタル所の意。梗概と連用す。例 概算、ナラシ、見ツモル意。

約

括り寄する意にて、大「グ、リ」といふに當る。

【おもふ】

思念 想 憶 懷 惟

思案、思慮する意。思慕、相思など、て慕ふ意にも、意思として「コ、ロモチ」の意にも用ゐる。例 熟思、慎思、思念、思考。

常におもひて忘れぬ意。思よりは其意輕し。例 念頭、觀念、念佛、念慮。

かくあらんと推量するにて、「思ヒヤル」、「思ヒマハス」等の意。例 其書を読み

て、尙其人を想ふ。想像、想望、構想、豫想、冥想、夢想。

「オモヒダス」意。例 記憶、友を憶ふ、追憶。

「フトコロ」とも、「イダク」とも訓みて、心に籠め、心に秘して思ふ意。例 君子は

刑を懷ひ、小人は惠を懷ふ。懷抱、述懷、懷土、追懷。

他念なく、一筋に思ふ意。例 伏惟、恭惟、思惟。

趣 赴 趨

一方にむくこと。又「ワケガラ」、「オモシロミ」、「コ、ロ」等の意あり。例 趣味、志

趣、趣意、趣旨、雅趣。

【おもむく】

趣

惟

懐 憶

想 念

思

趣

趨赴

ある場所に行くこと。例赴任
心にかけて、はしりゆく意。例拜趨

泳

水底をくぐる意。

游

泳に同じ。

及

水上をおよぎ渡る意。

逮

先方へ至りといく意。

追

追ひ付く意。例逮捕、逮夜、逮に同じ。

暨

及の意に同じ。

癡愚

智の反対にて、「バカ」のこと。
「リコウデナイ」の意。白癡といへば、氣拔けのせる全くの馬鹿をいふ。

魯

不敏、遲鈍の意。俗に「ノロイ」といふに當る。

岡

山の小高き處。

阜

地の段をなして、上の平なるをいふ。

陵

阜の如くに段をなさず、爪さきあがり高くなりて、上の平なるをいふ。

犯

阜の大なるものをいふ。

侵

獸などの、田畑をふみ荒す如く、無遠慮に人の領地にふみ入る意。例法を犯す。上を犯す。顔を犯す。犯罪。犯則。犯人。

冒

漸侵するにて、いつとはなしに、人知れずをかす意。例侵入。侵略。侵害。「モトム」とも訓む。此方より強ひて願ひ、權門などへとり入る意。物を蒙りて進む意。又、人の物をとりて、被ふる意。例矢石を冒す。風雪を冒す。姓を冒す。

怠惰懈

怠

心ゆるみて、ハル運氣のなきにて、ハル厭ひながらするをいふ。例怠慢、怠惰。

惰

勤の反対。精を出さぬ意。

【をこる】

惰に同じ。

奢

儉の反対。衣食住等につぎて、過度の美麗を好む意。例奢侈、奢靡、驕奢。

驕

謙の反対にて、自己の才學威福などを、人に誇りたかぶること。例驕慢、驕奢、驕傲。

驕傲。

約の反対。見えをかざる意。例侈大。

恭の反対。禮法を缺ぎて高ぶる意。例倨傲、倨慢。

人を輕蔑して、ふみつけにする意。例傲慢、傲然、倨傲。

治、修、理、收、斂、納、藏

亂の反対。バラクになれるものを、しづめをさむる意。例治安、治國、治民、治績。

悪しき所を、漸々に改善する意。例修身、修學、修繕、修了。

修

【をむむ】

治

筋道を立つる意。例櫛は以て髪を理む。政平にして、訟理る。家を理む。理解、理事。

理

「取り入ルル」、「シマヒオク」等の意。例收斂、領收、收穫、收斂。

「カキアツメ」、「トリコム」意。例手を斂めて之を避く。收斂。

先方へ大切に入れをさむること。又、「イル」とも訓む。例納税、上納、獻納、受納。

斂

見えぬやうにしまひおくこと。又はくらへかくし入るゝ意。例貯藏、珍藏、藏書。

藏

【をしふ】

教、誨、訓

用法廣し、上より下に教ふるにも、平生未來に必要あることを教ふる意にも用ゐる。例教育、教化、教導、教官。

教

言にて曉し教ふる意。教よりは狭し。

道理を以てをしへ、又、古來の定則に従ひてをしふる意。例兵を教ふるの虚名ありて、兵を訓ふるの實意なし。古訓是れ式。訓育、訓導、訓示。

誨

訓

【をしむ】

惜セキ吝リン嗇シヨク愛アイ
捨てがたく思ふ意。又、残り多きこと。例 惜別。愛惜。

「シワイ」の意。例 吝嗇。

所有物を失はんことを恐るゝ意。

めでたく思ひて、をしむこと。例 愛別。愛惜。

【をはる】

終シウ畢ヒツ卒ソツ了リョウ

始に對する辭。始めより最後までを一體にいふ意。例 終宵。終年。終日。終世。

物事のことごとく済み終るをいふ。終よりも強し。例 畢生。

「シ果セル」意。例 卒業。卒事。卒去。

畢に同じ。例 結了。終了。閱了。完了。

【をはるこ】

也ヤ矣ヤ焉エン

語の終におく辭にて、決斷の辭とも、訓釋の辭とも、歴數の辭ともなる。不知也。の如きは、決斷の辭。仁者人也。義者宜也の如きは訓釋の辭。修身也。尊賢也。親親也。敬大臣也の如きは、歴數辭にて、並べ立て、數ふる意あり。又一

矣

焉

【をる】

居 處

かの部

乎コ歟ヤ耶ヤ夫フ邪ヤ

「カ」とも「ヤ」とも「カナ」とも訓ず。故に疑辭とも、咏歎辭ともなるなり。例 仲尼豈賢於子乎。論語。彈鋏歸來乎。戰國策。中庸其至矣乎。論語。惜乎子不遇時。

句中に在りて、半は落ちつき緩めて、復起す意となることもあり。其爲人も

孝弟の如きは是れなり。

語已詞、又、決詞也と註す。也よりは意強く緊し。過去と未來とに用ゐて、現在

にはあまり用ゐず。例 使子路見之、至則行矣。論語。過去侍坐者請出矣。曲禮。未來

語終詞、又決詞と註す。浮立ちて揚る意あり。例 四十五十而無聞焉。終詞。斯

天下之民至焉。決詞。

居 處

起の反對、立ちたるものゝ坐すること。例 起居。居常。

出の反對、其處を離れず居る意。例 處士。處女。處子。處世の法。

歟

史記。乎に同じ。與の字とも通用す。例 求之與、抑與之與、論語、茲非幸與、韓文、可怪也與、韓文。

耶

「カ」「ヤ」と訓じて、疑問の辭に用ゐる。例 天道是耶非耶、史記、神人尙肯耶、孝武本紀。

夫

「カ」「カナ」と訓ず、咏歎の中に、疑問の意を含む。例 逝者如斯夫、論語、吾知免夫、耶に同じ。「ジヤ」の音の時は、「ヨコシマ」の意となりて、これとは別なり。

【かうばし】

芳

芳香の總稱。轉じて花、香氣、人の名譽の意にも用ゐる。例 芳香、芳紀十八、芳名、芳芬。

香

かをりの高きをいふ。花にも、焚物の薫にも用ゐらる。例 香氣、線香、抹香、餘香。

馨

香と同じく、香氣の芳烈なるに用ゐらる。例 彼蒙。

【かうぶる】

被蒙

もと寢衣の事なるが、轉じて覆ふ意に用ゐる。例 被服、四表に光被す。全體の見ゆる所なきまで、かうぶる意。又、裏むの意とも冒すの意ともなる。西施も不潔を蒙らば人皆鼻を掩ひて過ぎむ。

【かかぐ】

掲

高く引上げて人に見しむることに、亦た高くあぐることにいふ。例 掲竿、竿を掲ぐ。衣を掲ぐ。

褰

衣服の裾をまくりあぐるにも、帷幕などの垂れたるを引上ぐるにもいふ。例 帷を褰ぐ。裳を褰げて川を渉る。

挑

かきあげる、はねおこすなどの意。例 燈を挑げて書を読む。(燈心をかきおこして、明るくする意)。

【かがみ】

鏡

物の形状をうつすもの。例 檢鏡、破鏡の歎。鏡と同義なり。例 龜鑑、鑑戒。

【かかむ】

鑑

屈、僂、局。例 屈僂局。

【かがやく】 局 僂 屈

ゆがみまがること。例 尺蠖の屈するは伸びむがためなり。背をかがむること。

ちぢこまること。例 天に局し、地に踏す。

輝 輝耀 灼 赫 煥 煥

光の遠く照りわたるをいふ。例 光輝 清輝。日月星辰のかがやくなどにて、輝におなじ。

明白に、燃えたつ如く見ゆる意。例 灼然 灼々、灼に同じ。

【かかる】 煥 赫 灼 耀 輝

光明の盛大なる意。例 煥乎 煥發。

【かき】 嬰 羅 垣 墻 籬 藩 堵

ひきかゝる事。例 人主の逆鱗に嬰る。退嬰。あみにかゝること。故に禍にあふことにも、病にかゝることにも用ゐる。例 垣 墻 籬 藩 堵

【かき】 垣 墻 籬 藩 堵

家屋のめぐりを、低き築土にて圍ひたるもの。土塙の垣よりは高きもの。瓦と瓦との間に土を埋めて築きたるもの。竹を編みて作りたるかきをいふ。竹木等を植ゑて、家屋の、めぐりを圍ひたるもの。垣に似て高きもの。

【かき】 限 期 疆

とまりのあること。例 際限 年限。あてのあること。例 期して待つべし。日を期して答へよ。後音を期す。

【か】 懸 掛 疆 期 限

さかひのあること。例 萬壽疆なし。掛 懸 挂 挂 係 繫 繫 (自動詞の時にはカ、ル) 物を高所にかくすることにも、物の高所にかゝりたるにも、自他通じて用ゐる。

冠を掛く。劍を掛く。衣枝に掛かる。思を掛く。物を高くつりかかすることにて、自他通じて用ゐる。例 籠を梁に懸く。ランプを天井にかく。倒懸を解く。一生懸命。

挂 係 繫 欠 闕 虧 隠

掛に同じ。

かかはること。筋目通りにつなぐこと。例 關係係累。

つなぎとむる意。例 天下の安危繫る。繫縛。

欠 闕 虧

一定の数の足らざること。例 欠ぐることなく、餘ることなし。欠は音タナ

り、缺と誤用すべからず。

完の反對にて、物の全形を存せぬこと。例 缺勤。缺席。缺點。完全無缺。缺漏。

缺禮。

多數中脱落の所あることにて、缺は狭く一部分を顯はせども闕は稍や廣く用

ゐらる。例 闕員。闕略。闕所。

盈の反對。物の減少し行くこと。損じ毀るゝこと。例 盈虧。

隠 匿 竄 藏

見又は顯の反對。あらはれぬことにも、あらはさぬことにもいふ。例 隱見。隱

蔽。隱退。

隠 竄 藏

逃げかくるゝことにも、つゝみかくすことにもいふ。

逃げまはりかくる意。例 遁竄。

物を收め蓄ふることにて、そは外より見えぬものなれば、かくす、かくる等の

意に轉用す。例 秘藏。腹藏。寶藏。

如此。如是。若此。若是。如斯。若斯。

是此、斯の區別は、これ(是此、斯)の區別に同じ、同條を見るべし。如と若

とは、その意同一なり。

かげ

蔭 影 景

日かげ又は草木のかげの意。

日かげの意。

日光に照されたる物の形の、他に映りたるをいふ。

日光の物にあたりて、反射せるをいふ。

かける

翹 翔 翥

鳥の羽をのばして舞ふこと。

抄 計 算 堅 固 牢 硬

【かぞふ】

我物にする意。例 州郡を抄畧す。
計 算 數 事物の見つもりを立つること。即ち概數を見積りて、多小厚薄を考ふるをいふ。
十露盤に當て、見るといふ意。
物の數量をかぞふること。

【かたし】

堅 固 牢 硬 脆の反對。柔ならず、破れず、折れず、内部外部共にかたくして、確實なる意。
例 堅守、堅實、中堅、堅城。
破れ難く、崩れ難く、動し難く、外部のかたくつよきをいふ。例 美なるかな山河の固め、固執、堅固、頑固。
堅と固との中間の意を有す。内部までにもあらず、外部のみにもあらず。例 堅平として抜くべからず、堅牢。
軟の反對。少しくかたきにも、甚だかたきにも用ゐらる。例 硬骨、硬派。

【かたち】 形 容 貌 狀 態 像 傍 側 語

形 容 貌 狀 態 像 多きは、動物以外の物のかたちをいふ。例 方形、三角形。
多くは人のなりふりに用ゐる。擬人法としては、その以外にも用ゐることあり。山容などこれなり。例 美容、好容。
身體の一部分なる顔面のことの稱。例 外貌、美貌、容貌。
有様といふ意。例 人を撃つ状をなす。近狀、狀態。
様子からの意。例 態度、癡態、狂態。
或者に類似せるかたちをいふ。例 肖像、影像。
傍 側 附近、最寄などの意。例 近傍、傍若無人。
そば、かたわきなどの意。傍よりはその意狭し。
語 談話 兩者互にはなしあふこと。さればまとまれる話にはあらず。例 獨語、密語、喃語、壯語。

談話

前後の纏まりたるはなしをする事。例 美談 軍談 實歴談 叢談 談柄 談論 筋道を立て、人にはなして聞かす事。例 佳話 講話 説話 閑話 談に同じ。

【か】

勝 捷 克 戡 戡

負の反對にて、大小の事に係はらず、廣く用ゐらる。例 勝敗 戰勝 いくさにかつこと。例 捷報 祝捷

戦にかちて城邑などを取れることにて、捷よりは強し。例 攻むれば必ず克つ 某邑に克つ。克己。

戡

戦にかつのみならず、平定せる意あり。

【かつて】

嘗 嘗

なむとも、こゝろむとも訓む。このかつては、一度にても、二度にても、度數にかはらず、汎くいふ辭にて、前かたから、かねぐ、つねに、などいふ意。例 未嘗て聞かず。嘗て出遊す。

會

「チヨットデモ」一度モ」などの意。故に嘗は幾度の事にも用ゐらるれど、會は

【かど】

角 稜 廉

狭く一度の意に用ゐらる。例 會て家を出でず。會て京に遊ぶ。會て知らず。そとがはのかどにて、三角、四角などいふ。

かどばりたる事。

かどぢたる事。

【かなしむ】

悲 哀

喜の反對にて、用法廣し。不憫に思ふ意あり。例 悲痛 悲傷 悲觀 悲慘 悲劇 樂の反對。心に深くかなしむことにて、悲よりは強し。かなしむ聲なり。例 哀音聞くに堪へず。哀子。哀悼。哀傷。哀憐。哀痛。

稱 適 協 叶

よくつりあひて相應する意。例 名實相稱。腰のめぐり七尺長之に稱ふ。よく相合ひて相當すること。例 適當。適合。適宜。

心の和合すること。例 協同一致。協力。協同。協議。協の古字にて、意同じ。

【かなふ】

稱 適 協 叶

よくつりあひて相應する意。例 名實相稱。腰のめぐり七尺長之に稱ふ。よく相合ひて相當すること。例 適當。適合。適宜。

心の和合すること。例 協同一致。協力。協同。協議。協の古字にて、意同じ。

【かぬ】

兼攝該

しわざの二つにわたること。例 兼帯 兼官 兼程

かりにはからふ事。例 攝政 攝行 攝取

すべくくる事、兼に備の意あり。例 萬物該兼 該當 (俗語、ソノハ) 該府 (俗語、其當職の意)

【かは】

川河

水流の大小長短に關せず、すべて土地の窪める處を流れざる水の稱とす。例

大川 巨川 細川 小川

支那北部の黄河の稱なりしが、北方諸流の黄河に入る諸川をも河といへり。故に用方狭し。例 銀河 河漢 河渠

【かは】

皮革韋

肉を包めるもの。

毛を去りて、清潔に造りたる皮。「ツクリガハ」と譯す。

やはらかにしたる皮なめしがは、をしかは、などといふに當る。

【かはる】

變化 代替 更易 更換 渝

變 化 代 替 易 更 換 渝 常の反對。急にかはること。例 天變 地變 機變 應變 變詐 世變 時變 變轉 變色

かはりきりたることにて、原質までかはるをいふ。故に變は一部分なれども、化は全體のかはることにて、その意強し。例 教化 文化 化石 徳化 化育

かはると、かふと自他通用す 代理の意。例 代言人 代書人 代議士

物を取りかふる意。例 交替 隆替 爲替

事物そのもののかはるにも、物と物とを取りかふるにも用ゐる。意義用法尤も廣し。例 改易 萬世不易 貿易 交易

かはると、かふとの自他通用す。變改の義にも用ゐらる。夜間を初更二更など、分つも、かはる意なり。例 更改 更代 變更 紛更

或物を先方に遣りて、其かはりに先方より他物を受取るをいふ。例 交換 換易

悪しく變することにて、盟を破り、約束を變改する意。例 渝盟 渝言 渝色

飼畜牧 豢 豢

【かふ】

渝 換 更 易 替 代 化 變

飼 畜 牧 象 参 買 沽 部

鳥獸に食餌を與へて養ふこと。例 飼養。飼育。
 チウの音の時は、たくはふる意となり。キウ又ハキウの音の時は家に養ひか
 ふ鳥獸の意となる。されば畜生はキウシヤウ又ハキウシヤウが正しけれど、今
 ハ習慣に従ひてチウといふ方穩なり。例 畜養。畜生。飼畜。
 牛馬羊豚などを野に放ちて、草を食はしめ養ふをいふ。轉じては治民のこ
 とにも用ゐる。例 牧養。牧場。牧狩。牧民官。牧師。
 獸類を檻中に入れて、養ひ置くこと。例 象養。
 買 沽
 買ひて、あきなひをすること。例 商買。賣買。
 かふとも、うるとも訓む。買は、大買することなれど、沽は小買する意なり。例
 沽酒。
 却(却)反
 しりぞくとも訓む。退却と連用する字なり。進んで勝たんと謀りながら、思ひ
 の外に退却して勝つことを得ざりしが如きを「勝たうと思ひて、かへつて負

反 顧 省 眷 歸 還 反 返 復

けたといふ(却)の字は卻の俗字なり。
 反對になること、ひっくりかへること。全く豫想と反すること。
 顧 省 眷
 ふりかへりて見ること。後方に心を置くこと。例 愛顧。恩顧。願望。願盼。顧問
 顧念。眷顧。
 見まはること。又我心につくづくと思考するにもいふ。例 省察。省視。反省
 自省。三省。歸省。
 目をかけて愛する意。例 眷顧。眷戀。眷々。
 歸 還 反 返 復 廻
 かへり落著く意。例 歸朝。歸宅。歸順。歸納。歸嫁。歸依。歸省。
 往の反對。來りし道を立ちかへる意。例 師を還す。債を還す。還俗。還魂香。
 往きて復取つてかへすをいふ。還に似て強し。例 反照。反省。反動。反問。反駁。
 廣く普通にかへる事には、いづれにも通じて用ゐる。
 今來りし道をその儘返るをいふ。再度の意を含む。例 復活。復籍。回復。復答。

廻

本復ホンブク 急に方向を變じて、引きもどし來るをいふ。又まはり道をしてかへるにもいふ。例 迂廻。

【かまびすし】

喧嘩ケンケン 聾聵カウカウ 聒クワツ

大聲にて競ひしやべること。例 喧噪。喧嘩。喧傳。口々にしやべりたつること。例 喧嘩。

大勢聲をあげて、やかましく騒ぐこと。「ガマビスシ」と訓む。耳の遠くなるまで、がやくとやかまじきこと。例 喧聒。

【かみ】

神カミ 天のかみなり。又陽に屬するかみなり。例 天神。地のかみなり。又陰に屬するかみ也。例 地祇。

咬カウ 嚙セイヤウ 咀ツツ 嚼シヤク くひつくこと。かみきりて食ふこと。

【かむ】

噬咬

【かながふ】

嚼咀嚙

がぢくとかむこと。口中に含み居て味ふこと。ニチヤ〜と音をたて、かむ意。

考稽案勘校

道理を思ひはかること。例 考案。熟考。考查。考古。

兩者を比較して、かながふること。深く注意する意あり。例 稽古。荒誕無稽。思案すること。胸に手を當て、熟考すること。例 考案。新案。案出。好案。

反覆考定の意にて、くりかへし吟味すること。例 勘定。勘當。勘考。引較べ見較べて考ふること。例 校合。校正。

【からし】

校勘案稽考

辛鹹

芥子、蕃椒、山葵などの、烈しく舌を刺すが如く辛きこと。それより、むごく、つらきことに轉用す。例 辛苦。辛酸。辛き目。辛辣。

【かり】

鹹

海水の鹽がらきをいふ。田獵狩。

【か】 狩 獵 田

四季鳥獸をとるかりの總稱。田に同じ。されど、獵は大なるかりに、田は小なるかりに用ゐる。冬のかりをいふ。冬はかりをするに、尤もよき故に、廣く此字を用ゐる。

【か】 枯 槁 涸 嗄

枯槁 嗄涸。榮の反對。草木の死すること。枯死。枯木。枯骨。草木の枯死して、乾燥せるをいふ。形容枯槁。聲のしわがるゝこと。池沼川湖等の水の、無くなること。

【か】 刈 芟 刈 芟 渠 彼

刈 芟。草をかる事。刈に同じ。彼渠。此の反對。「カレ」とも「カノ」とも訓む。詎の字とも通用す。あの人といふ意。俗語に専ら人を指す辭とす。

【か】 乾 燥 渴

乾燥 渴。濕の反對。しめりげの無くなること。又かわかすことにも用ゐる。例 乾燥。潤の反對。火熱のためにかわくこと。例 高燥。喉に潤ひのなくなることに、水のほしくなれることにも用ゐる。例 渴して。盗泉の水を飲まず。飢渴。

きの部

【き】 聽 聞

聽 聞。自分より注意してきく意。例 講義を聽く。政を聽く。謹聽。傾聽。靜聽。聽衆。傍聽。先方の聲の耳に入ること。又は、おのづから、きこゆるをいふ。例 聲天に聞ゆ。令聞。新聞。名聞。聲聞。

【か】 萌 光

萌 光。草木の萌芽の意。轉じて事物の發端の稱とす。

兆

【きりび】

事物の發生せんとする前觸の「シルシ」にて、萌よりも以前に屬す。

刻彫 刻コトナウ

刻と同義なり。

【きし】

岸涯 水ぎはの高き處。

水際なり。水のゆきとまりたる處なり。例津涯。

【きしる】

軋軋

車と車との齒の噛み合ふこと。それより相争ふことに轉用す。

車が他物の上に廻りて、其齒の當る意。其より争ひて他を凌ぐ事に轉用す。例軋軋。凌軋。

【きず】

疵創傷 疵の如ききずをいふ。例小疵。疵瑕。

切りきずをいふ。例創傷。

傷瑕

【きぬ】

衣絹 俗にいふ「ナマキズ」の意。例刀痕。痕痕。

著物の總名。例著衣。蠶の繭より、絲を延きてとれるもの。例絹絲。絹布。

絹絲にて織れる織物をいふ。故に布帛といへば、木綿と絹織との事。絹帛といへば、絹絲の織物をいふ。

【きはむ】

窮究 窮極 谷 行キツメ、行キツマル等の意。窮理といへば、道理の此以上はなき所まで

達せるをいひ、困窮といへば、困難の最極點をいふ。例窮達。窮迫。

事物の理を推して、終りまで尋ね至り、詮じつむるをいふ。例研究。學究。究尋。究竟。

極

至端至極の意にて、至り届きてその先なきをいふ。例 極端 極力 至極 究極 身動きのならぬこと。例 進退維谷

【きびし】

嚴 緊

寛ならざる意。例 嚴重 威嚴 嚴父 緩みなき意。例 緊急 緊要 緊切

【きゆ】

消滅 湮 消滅 湮 (自動詞の時はキユ) 他動詞の時はケス

消

きえて、無くなること、廣く用ゐらる。例 消亡 消火 霧消散す 日を消す 暑を消す

滅

火のきゆること、それより物の見えなくなることに用ゐる。例 火のきゆること 例 熄滅

湮

薄くなりて、形の定かならぬこと。例 煙滅

【きよし】

清淨 濁の反對にて、水の澄むこと、轉して「サワヤカ」なるにも用ゐる。例 清風 清涼 清澄

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

【きる】

淨 穢の反對にて、綺麗なること。例 淨土 清淨 汚の反對にて、甚 清きこと。例 高潔 潔白 純潔

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

【きる】

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

著

著 被衣 著 被衣 著 被衣 著 被衣

裁

衣類を断ち切るにいふ。轉じては、正理によりて判断するにもいふ。例 裁定。裁判。裁縫。

くの部

【くろく】

朽 腐

草木などの脆くぼろくになれるをいふ。例 朽木。朽索。

【くだく】

碎 摧

肉類果實などのくさりて、食ふべからざるをいふ。例 腐敗。腐心。腐儒。

細かく、くだきやぶること。例 破碎。零碎の文字。

ひしぎくだくこと。例 破摧。摧折す。

【くだる】

下 降

上に對する語。真直ぐに下の方へくだる意。轉じて謙遜の意に用ゐる。例 垂下。直下。卑下。

登に對する語。坂路の如きを斜にくだる意。下よりはその意弱し。例 階を降

【くつ】

靴 履 屨

元來軍陣用のものに限るなれど、今は常用のものに用ゐる。

皮ぐつなり。

ひとへのくつなり。

【くつがへ】

顛 覆

上より下へ真直ぐに殞つることに、下方の者の却りて上方になるにもい

ふ。例 顛仆。顛殞。顛覆。顛倒。顛下。顛墜。

上方の者が下になり、下方の者が上になりて倒るゝをいふ。例 覆倒。覆没。覆滅。覆轍。覆軍。覆盆の雨。覆車。

【くづる】

崩 壊

自他共に通用す。山岳、巖、岸などの大なる者のくづれ落つること。例 土崩。

崩御。崩壞。

自他通用す。物の少しづつ、破れくづるゝをいふ。例 破壊。壞廢。

府庫倉廩藏 暗闇昏昧

貨財寶物を藏する所。

兵器、車輛などの道具を入れ置く所。

五穀を入れる、所但し未だ刈りたるまゝのもの。

五穀の既に粗などを去りて食ふべきやうになしたるものををさむる所。總べて物を收めたく所にて、用法廣し。

【くらし】

暗闇 昏昧 晦

明の反對。日月燈火のくらさにも、道理にくらさにも、精神のくらさにも、通じて用ゐる。例 暗愚、暗夜。

音義共に暗に同じ。

昏暮と連用して、太陽西山に入り、暮色四山を罩むる頃をいふ。精神のたろか

にくらさ意にも用ゐる。例 昏黒、昏味、昏昏、昏冥、昏迷。

薄暗く分明ならざる意。例 愚昧、暗昧、昏昧、朦昧。

眞暗の意、多くは、人目を避け、才能をくらましかくす意に用ゐる。例 韜晦。

晦暗、晦澁、晦迷。

【くらふ】

食 喫 餐 啖

物をくふ意。その意廣し。例 飲食、美食、酒食、食言。

口中に入れて物をくふこと。例 喫飯、喫茶、喫酒、喫煙、喫棒。

煮て熱せる食物をいふ。くらふと訓む時は其儘食ふ意。例 餐飯、加餐。

噛み碎いて食ふこと。例 健啖。

【くらぶ】

比 較

二物を合せ見て、其差違を知ること。例 比較、比例、比況。

きそひ、くらべて、物の勝敗、優劣をみること。例 競馬、競走、競争。

【くるしむ】

苦 困 窘

「ニガシ」とよむ字。なやむ意。例 辛苦、苦心、苦勞、艱苦、苦樂。

難儀をして、なやむこと。例 困窮、貧困、困難。

たしなめ、こまらす意。例 窘窮、窘束、窘迫。

【くれ】

晚 暮 昏

日の入りかゝれる時。

昏暮

【くろし】

日の入り果てたる時。
日の入り果て、既に暗くなりたる時。

黒 縮涅 黧 玄
墨の色スミの如く、くろきこと。

縮衣シユクイと連用する時は、袈裟ケサの色イロのくろきこと。

黒クロき泥土ドの色イロをいふ。例 涅齒。

煤スの色イロの如く、くろきこと。例 黧黑 黧牛。

六入ムシホを玄ゲンと云ふとて、赤アカき色イロよりだんくんに、六入染めたる色合イロアヒのことなり。

故に黒色クロイロの中に赤アカき色イロを帯オびたる者。例 玄米 玄端 玄黄。

玄 黧 涅 縮 黒

けの部

【けがす】

汚 穢

汚クワ、穢タイ 瀆トク (自動詞の時ケガスはケガル 他動詞の時ケガス)

不潔フケツなる水ミヅにて、濁水ダクスイの流れナガれざるをいふ。轉じては、惡風アクフウ、徳惡アクトクのことにいふ。「汗」の字ジと同じ。例 汚穢 汚水 汚濁 汚名 汚行。

穢 瀆

田畑デンバタの中ウチに雜草ザツサウ生じて、きたなきをいふ。汚クワよりは更サラに重オモし。例 穢土 穢徳 穢行 觸穢 穢多。

惡意コノイに任せ、又は惡意コノイの者モノのやうにもてなして、無禮ムレイにわたること。言語行爲ゲンゴカクキの上に、敬意ケイイ、禮容レイヨウを失シツするをいふ。例 尊嚴ソンエンを冒瀆バウトクす。褻瀆セツトク。

【けする】

削 刪 刊 剋
削サク 刪サン 刊カン 剋ワン
とりのぞくこと。例 添刪 筆ヒツすべきは則スナハち筆ヒツし、刪サンるべきは則スナハち削サクる。

爲更シカふること。例 律令リテイを刪サンり定サダむ。

きりとること。刊カンと書シくも意イは同じ。但し、刊カンは音オンセン。例 山ヤマに隨シタガひて木キを刊カンる。改刊カイカン 追刊ツイカン 發刊ハツカン。

剋ワンるぐりとること。例 心頭シントウの肉ニクを剋ワン卻キヤクす。

【けはし】

險 嶮 阻 峻 峭
山ヤマのいは、かどだちて、はげしきこと。例 王侯險ワウコウケンを設テウけて其國ソノクニを守マモる。

險ケンと同字。

險阻ケンソと連用す。阻隔ソクカクして、通路ツウロなく、行ユき難ガタき意イ。

阻 嶮 險

けの部 けづる けはし

猶 似

譬へて云はゞの意にて、彼を假りて、此を明す辭なり。例兄弟猶此箭也。如若と同様に用ゐる。

【殊】

殊 特 異

別にして、事に區別あるをいふ。別段にの意即ちかけ離るゝこと。例殊死。殊遇。殊功。殊勳。殊異。

特 異

取分けの意。多くの物の中より、一つを取出す意。例異姓。異日。異域。異聞。

【このむ】

好 喜

悪憎の反對心にすくことなり。歡喜の意にて、よろこびすくこと。

【こひねがふ】

冀 庶 冀 希 幾

「チカシ」とも訓む。願ふ意なり。冀に同じ。

冀と通用す。「マレ」ともよみて、めづらしがりて願ふ意。

【こむ】

幾 請 乞 巧

冀と同義なり。請 乞 巧

先方の様子を伺ひ問ひて所望する意。又、ねがはくは、どうぞなどの意ともなる。例請問。懇請。請願。申請。起請。

我身の利害を主として、切にこひ求むる意。例乞食。骸骨を乞ふ。身を乞ふ。斧正を乞ふ。

物を所望すること。乞より其意輕し。例乞巧。巧婦。

【こぼす】

巧 溢 零

水のこぼれいづること。例溢出。溢美。

涙或は露などの落ち散ること。例零露。零々。零落。零丁。

【こぼつ】

零 毀 墮

少しく物の缺けたるにも。悲み瘦するにもいふ。例破毀。毀損。毀傷。

【こぼり】

墮 毀 冰 凍

うちこはして取拂ふこと。

【こまやか】凍氷 密濃緻績超越 是【れ】踰

水の寒さのために凝結せるもの。【例】氷解。氷釋。結氷。寒さにこまゆること。【例】凍死。凍餒。

密濃緻績

疎の反對。間のすかぬこと。【例】密接。

淡の反對。【例】濃厚。濃綠。

きぬの目のつまりたること。密の義に用ゐる。

緻と同義なり。【例】績密。

越超踰

踏みこえてゆく意。【例】山を越ゆ。僭越。越權。越卓。

飛びこゆ、躍りこゆ等の意。【例】泰山を挟みて、北海を超ゆ。超然として高擧す。超絶。超群。超越。超過。超乘。

ひと跨ぎにこゆるにて、越に似たり。【例】牆を踰ゆ。月を踰ゆ。

是此之斯維惟諸旃

非に對する語。心には是非を判斷し、道理に對して用ゐる字。【例】此の因あれば、

此 之 斯 維 惟 諸 旃

是の果あり。是以。於是。

彼に對する語場所又は、物體を指示す。又文章中に在りては、上述の事件を總括していふに用ゐる。【例】此日。此宿。此の如し。……此を以て我其の然る所以を知る。

此、是と同様に用ゐられるれども、その意共に輕し。上述の事を承けていふにも、下の事を指していふにも用ゐらる。【例】之に従つて之を見れば……博愛を之れ仁といふ。

この筋合(道理)といふ意にて、此、是よりは、その意甚重し。【例】斯の人にして、斯の病あり。斯文。斯道。

文句の初めに用ゐる、人の注意を惹起するに用ゐる。【例】維時明治……維に同じ。

「コレヲ」と讀む。之乎二字の合字なれば、この二字を用ゐるべき所に使用す。【例】山川其舍諸。歸諸京師。

文句の末を結ぶ時に用ゐる。之焉兩字の合字なり。

【ころ】

頃 比

「ヲリ」節の意。例 頃日。頃者。

頃 比

「コロホビ」とも訓む。過去より連続して、現時までに及べる意にも、亦未來に及ぶことにも用ゐらる。

【ころす】

殺 誅 戮 弑 死

生物の命を絶つことには、總べて用ゐらる。

罪惡を數へ責めて殺すをいふ。

罪惡を數ふるのみならず、懲惡のために殺すこと。

人の臣子たるもの、おのが君父を殺すこと。

他殺にあらすして、自然に死ぬるやうにすること。

さの部

【さの部】

幸

幸 福 祐 祉 祥 禎 倖

案外なる仕合せをいふ。例 幸運。

福 祐 祉 祥 禎 倖 界 境 疆 杯 盃 觥

【さかひ】

彼と此との間の「シキリ」をいふ。

界の内部をいふ。即ち「シキリ」より内がはなり。例 境内。國境。

土手を設けたる界をいふ。例 封疆。

【さかひ】

杯 盃 觥 蓋 木を曲げて造りたる物。又は、磁器製の物をもいふ。

杯の俗字なり。

角にてつくりたる杯の小なる物をいふ。

觥 蓋

觥の大なる物をいふ。
杯の小なるものにて、猪口の類をいふ。

【さかふ】

逆 忤

順の反對、不順にしてさからひ、もとの意。例 逆賊、逆意、大逆。
心にさかひ、もとの意。

【さかり】

隆 盛 熾 昌 壯

隆 盛 熾 昌 壯
替の反對、次第に高くなる意。例 隆起、興隆。
衰の反對、次第に大きくなる意。又、さかり最中、極度等の意あり。例 盛大、盛世、盛會、盛況、盛宴、旺盛、盛怒。
火の烈しく燃えあがること。それより轉じて威勢のさかんなるをいふ。例 熾盛、昌熾。

【さき】

壯 昌 熾 隆 盛 先 往 前 嚮

漸次開明なる意。又漸次多くなる意。例 繁昌、昌平。
強大の意にて、氣力さかんなるをいふ。例 壯健、雄壯、壯年、壯夫、壯語。
先 往 前 嚮

先

物の順序、時の區別、過去のことにも用ゐる。例 先陣、先哲、先鞭、先聖、先天、先日、先般、先月、先人。

往

過去の事にいふ。例 往古、往事、往昔。

前

時の上にも、順序の上にも用ゐる。例 前世、前日、前途、前進、面前、目前。

曩

過去となりて久しきをいふ。例 曩日、曩者。

嚮

過去となりて稍や久しきをいふ。嚮に同じ。

【さ】

割 裂 剖 劈 析

割 裂 剖 劈 析
刀にてさく。又、刃を横にして切り分くる意。例 割讓、割腹、割據、分割。
布帛をさく意より、廣く用ゐらる。例 裂帛、支離滅裂、四分五裂。
「タチワル」切り開く等の意。例 腹を割く、解剖學、剖判。
「ツンザク」刃物にて頭よりうちわる等に用ゐる。例 劈頭、斧劈。
木をさく意。又、明かにする意。例 分析、辨析。

【さへん】

探 搜 摸

探 搜 摸

窺ウカガひさぐる意。探偵タンテイ、探索タンサク、探險タンケン。有りしもの見えすなれるを、さぐりもとむる意。例 搜索ソウサク。手にてさぐる意。例 暗中アンチュウに摸索モクサクす。摸稜モリョウ、摸はさぐる時には音バクオンバクなり。今習イマシユ慣クワンによりてモと訓めり。

【さけぶ】

號 叫

さけび呼ばはること。例 號泣ガウキウ、號哭ガウコク。

【さけぶ】

大聲にてさけぶこと號ガウに同じ。人にも禽獸キンジウにも廣く用ゐる。

捧 擊

兩手を高くさしあげて、物をうくること。

高くさしあげてもつこと。

挾 夾 插

腋ワキにかゝゆること。それより或事物アルジツブツを頼タノみにする意イに用ゐる。例 泰山タイゼンを挾ワサみて北海ホクカイを踰コゆ。挾書ケツショ、長チヤウを挾サシむ。貴キを挾サシむ。

音義オンギ共に挾ケツに同じ。但し、左右サイウより持ジする意イあり。例 夾輔ケツホ。

【さしはさむ】

夾 挾 擊 捧

【さす】

挿 刺 螫

さし込む意。例 挿秧サウアフ、挿註サウチユウ、插花サウカワ、挿頭サウトウ。

とげのたつこと。芒刺背ボウセンに在り。

毒蟲ドクムシのさすこと。

聰 敏 慧

耳ミミのよくきこゆることにて、「サトキ」をいふ。例 聰明ソウメイ。

鈍ドンの反對ハンタイ、心ココロの「スバヤキ」の意。例 敏捷ビンセツ、穎敏エイミン。行ユキに敏ビンなり。機敏キビン。

細智サイチのかしこ意。例 小慧セウケイ、慧敏ケイミン。

覺 悟 曉 諭

眠りネムリのさめたる如ゴトく、知らぬことを、明アカかにさとする意。例 覺知カクチ、覺悟カクゴ、覺醒カクセイ。

自己ジゴの心の迷マヨのひらくる事。例 悟入ゴニラフ、大悟ダイゴ、了悟レウゴ、頓悟トンゴ。

「アカツキ」とも訓みて、夜明ヨアケのことなれば、轉マシじて、暗クラかりしもの、明アカルくなり來キタるをいふ。例 通曉ツウグウ。

心ココロによく合點ガツテンする意。「サトス」と他動タにも用ゐる。例 君子クンシは義ギに諭サトる。

諭

【さむ】

了 分明にさとする意。例 了解、了悟。

【さむ】

覺 寤 眠のさむること。例 長夜の眠りを覺破す。

【さむ】

目 酒の酔のさむること。例 衆人皆酔へり、我獨醒めたり。

【さむ】

晒 曝 麻布、綿布などの色を白くせんため、洗ひて日にあつること。轉じて衆人の目に觸るゝやうにすること。例 布を晒す。恥を晒す。

【さむ】

去 距離 物を屋外に露出しおきて、風雨にまかせおくこと。曝は元來暴の俗字なり。

【さむ】

來の反對。其場所を立退くこと。例 退去。死去。去就。

【さむ】

行違ひ離ること。例 忠恕は道を違ること遠からず。

【さむ】

騷 躁 急にさわぎ亂ること。例 騷動。騷擾。騷然。

【さむ】

やかましく、わめきさわぐ意。例 喧譟。鬧譟。

【さむ】

竿 棹 竹の幹の枝葉を去れるもの。例 百尺竿頭。日高きこと三竿。

【さむ】

水底を突き、舟を動かす意。例 棹歌。

【さむ】

權のさをのこと。例 權衡。

し の 部

【しかり】

然 爾

「サウヂヤ」と先方の言を許諾する意。例 然諾。當然。「カウヂヤ」といふ意。何々に對する我考へは爾り、の如く、上述の事件に對

【しかる】

し、自己の考に重きを置きていふ語。

叱 訶

聲を勵ましていふこと。例 叱咤。

責むることにて、叱よりは輕し。例 呵責。

【しきりに】

頻 連 荐 累 切

事の繁くつゞくこと。たびく、おひかけく、などの意。例 頻繁 頻々。

引きつゞきて、されざること。例 連戦連勝 連年 連夜。

いやがうへに重りつゞくこと。例 災眚荐に至る。

たゞみかくることにて、連に似て急速なる意。例 累遷して大將に至る。

「ヒタト」の意。例 切迫 切思 的切 切實。

【し】

布敷 席 藉 鋪

物を地にまくこと。それより他の意に轉用す。例 敷を布く。政を布く。枝葉布く。流布。布令。

布の意に同じ。

席 藉 鋪

「ムシロ」とも訓みて、下じきにする。易に席以白茅と見ゆ。

草を下にまきて下じきとすること。席の意に同じ。例 狼藉。

門扇の金具に、金を延べてつけたる者をいふ。それより、蒲團、席などをしく

ことにも用ゐる。

【し】

及 如 若

「シク」と訓む。走るものに、後より追ひつくこと。

及ぶこと。不如といふ時は、及ばぬことなり。

其義如に同じ。

【しげし】

蕃 稠 茂 繁

物の多くありて、文采の雜入せる意。例 繁文褥禮 繁雜 繁茂 繁簡。

一つの草、又は一つの木のまげること。多數の意はなし。例 茂林 茂生 茂才。

草のまげく生へたること。轉じては、多數の者の、隙間のなきにいふ。例 稠人。

廣坐 人家稠密。

草の茂りて、多くなること。轉じて物の殖ゆることに用ゐる。例 蕃殖 子孫必

滋

す蕃からん。
水の浸染して、漸次に廣くなる意より、轉じて其數の多くなることに用ゐる
◎ 綠苔滋し。景色滋し。

【したがふ】

從 順 隨 循 遵

從 順 隨 循 遵 率
違の反對。先方の言に従ひ違はぬ意。又、人につきて行くことにも、又、唯、つくことにも用ゐる。◎ 雲は龍に従ふ。適從。從者。侍從。從軍。從卒。服從。從順。從事。

逆の反對。物事にさからはず、そひてゆく意。◎ 順風。順逆。順良。柔順。和順。順序。孝順。耳順。

先方の意見の通りにしたがひて何事をもすること。又、あとについて行くこと。◎ 隨行。隨從。隨意。隨筆。隨伴。隨分。隨處。

牆、塀又は道などの動かぬ物に沿ひて行くこと。それより無形なる一定不變の眞理にしたがふことにもいふ。◎ 法度に循ふ。天命に循ふ。天理に循ふ。或事を法則として、その通りにすること。又、心に尊みしたがふ意あり。◎ 遵

【したしむ】

率 親 昵 暱

奉 遵 守 遵 依
遵に同じ。
親 昵 暱
疎の反對。◎ 親近。懇親。
親の意に、私の意を兼ねぬ。故に婢妾又は嬖臣を近づくることに用ゐる。◎ 親昵。其義昵に同じ。◎ 私暱。

【したむ】

慕 欽

なつかしくて、離るゝに忍びぬ意。◎ 思慕。景慕。愛慕。
心に尊敬してしたふこと。◎ 欽慕。欽仰。

【しづか】

靜 閑 徐 謐 寂 寥 閔 寞

動、躁の反對にて、動かす、騒がしからぬこと。◎ 靜穩。靜止。靜肅。靜寧。沈靜。靜坐。動靜。
忙の及對。する事なく、ひまなること。◎ 閑職。閑散。閑雲野鶴。閑談。閑話。閑日月。閑人の閑事業。閑地。閑暇。

徐

疾シツの反對ハンタイ。言語動作等の急速キツソクならぬこと。即ち緩やかスナハユルに、しづかなる貌カタチ。例除ジヨ行カウ。徐々ジヨク。徐歩ジヨホ。

謐

静寧セイネイなる上に、音聲オンセイなき意イを兼ね。例静謐セイヒツ。

寂

喧ケンの反對ハンタイ。物音モノオトの全く止むマツタをいふ。それより静セイの極キョクをいふ。例寂寞セキヤク。寂寥セキレウ。寂然セキゼン。寂関セキケン。

寥

寂セキに同じ。

寞

寂セキに同じ。

寞

寂セキに同じ。

沈

沈チン。瀾ラン。漚ソウ。

漚

浮フの反對ハンタイ。物モノの水中スイチュウにかくるゝこと。それより人事ジンジ其他ソノタにも用モチゐる。例晉陽シンヤウを圍カコみて之コレを水ヒタす。城シヤウの沈シツまざる者モノ三板サンパン。日ヒ沈シツむ。月ツキ沈シツむ。夕陽セキヤウ沈シツむ。陸リク沈シツ。深シン沈シツ。世セと浮フ沈シツす。

瀾

其義ソノギ沈チンに同じ。沈チン瀾ランと連用レンヨウす。例隱瀾インラン。瀾喪ランサウ。

漚

酒サウびたしとなること。行オコナヒの亂ミダれたる人ヒトに用モチゐらる。例沈漚チンソウして色イロを冒ムサり、敢カウ

【しづむ】

へて暴虐バウギヤクを行コナふ。

【しづむ】

死シ。崩ホウ。薨カウ。卒ソツ。歿ボツ。天テン。死シに對タイして、貴賤キケンの別ベツなく通ツウじて用モチゐる。例死活シクワツ。死別シベツ。死亡シバウ。戰死センシ。天子テンシの死シをいふ。例崩御ホウギョ。

【しづむ】

天子テンシに次ツぐ貴人キニンの死シをいふ。皇族クワウツク及キび三位サンキイ以上イの人ヒトの死シを稱シヨウす。例薨去カウキョ。人臣ジンシンにて、五位ゴキイ以上イの人ヒトの死シの稱シヨウ。

【しづむ】

人ヒトの死シして、世セに在アらざる稱シヨウ。

【しづむ】

年ネン若ワカくして死シするをいふ。例夭死エウシ。夭折エウセツ。

【しづむ】

數スウ。屢ル。亟キツ。驟ソウ。

【しづむ】

時々トキトキうるさく迫セマる意イ。たびくせきたつること。引續ヒキツきしきりにイの意イ。

【しづむ】

方法ヘウホウを換カへて促ウナす意イ。

【しづむ】

少スコしづ、時々トキトキする意イ。

【しづむ】

暫ザン。姑コ。須臾シユユ。頃刻ケイコク。

【しづむ】

驟ソウ。亟キツ。屢ル。數スウ。

しの部 しづむ しはらむ

暫

姑

頃刻

【しむ】

強

誣

【しほむ】

凋

萎

【しむ】

程經ぬ間のことにて、暫時と熟し、時の上についていふ。一時間のことにも二時間のことにも、二日三日、二月三月のことにも、場合によりて用ゐらる。事件の上についていふことにて「ママ、ママ、チヨット」の意。例 姑之を舍け、姑息。

少時間のうちをいふ。須臾に同じ。

強 勢力を以て、無理に押付くること。

誣 是を非の如く、無實を實の如く、言ひ曲ぐるをいふ。

無理にこちつくること。論語に、君子可欺不可罔也、とあるが如し。

凋 形容のしほむことのみならず、半傷るゝ意。

萎 形のしなびたること。例 萎靡振はず。

使 役と連用する字にて、我より彼に、或事をせさする事。例 民可使由之、使

使

令

教

俾

遣

退

斥

屏

【しりぞく】

上知之。命令と連用する字にて、使に似たれど、意重し。例 令天下昭然知之。

我より教へて、人に爲さしむる意。例 進則教良民爲姦退則令善人有禍。

使に似て、其意輕し。例 俾予從欲以治。送也、縦也の義なれば、彼に任せて拘束せざる意。例 齊王遣使求臣女弟、戰

國策。遣張良往立信爲齊王、淮陰侯傳。

退 進の反對。後へ引去ること。例 退歩。退卻。退軍。退去。退席。撤退。辭退。退職。

却と書くは俗字なり。後退して避くる意は退に同じ。又、受附けぬ意。例 且つ戦ひ且つ卻く、之を卻けて不恭となす。

斥に似て緩し。例 屏居。屏息。人を屏けて與に語る。他を輕蔑し、又は反對して逐拂ふこと。

【しる】 黜

官位を下げらるゝこと。例 黜罰 黜陟 貶黜

知 知識

深く事の真相物の本性をしること。例 知己 知音 知友 知命 某公の知を受

【しるし】 識

事物の外部を見覚ゆることにて、知よりはその意淺し。例 學識 面識 認識

【しるし】 徵

物事の引合せになるしるし。例 徵證 徵候

「アカシ」とも訓む。證據となるもの。例 證書 引證 考證

【しるす】 驗

物事のきゝめのあるをいふ。多くは無形の者の結果をいふ。例 効果 効力 効

驗 藥方 祈禱 預言などのきゝめあるをいふ

【しるす】 記

記 紀 識 録 誌 題 署 勒 書きしるすこと。又しるすこと。紀もしるす意は記に同じけれども、記は心に

【しるす】 紀 識 録 誌 題 署 勒 城 堡

存して忘れぬこと。故に記念と書くべきを、紀念と書くは誤なり。例 記念 記

載 記憶 記述 筆記 記の條を見よ。例 紀行文

文章を書きしるすこと。書きうす意。例 記録 日録 手録 語録 筆録 目録

書き記す意。例 日誌

目につくやうに書きしるすこと。例 題辭 題詠 題額

書檢也と註す。書籍の見出しのことなるが、それより轉じて、念を入れて書き

つくることに用ゐる。

きりつけ、又はほりつけおくこと。例 物工の名を勒す

城 堡

土を築き、塹を掘り、壘を積みあげて、造りたるもの。例 都城 宮城 城址 城

寨 「シロ」と訓ず。かきあげじろとて小城のこと也。例 營堡 城堡

【しろし】

白素皓皚皎

黒の反對。廣くしろきものの總稱とす。轉じて明かなる意にも、曇なく潔き意にも用ゐらる。例 白日、明白、白雪、白晝、潔白、白玉。染めざる絹にて、本質のまゝなるをいふ。それより、ものの飾りなきにも、修行を加へぬにもいふ。例 素練、素人、素面、素朴。白色の光澤あるをいふ。白よりもその意狭し。月雪などの形容に用ゐる。例 皓月、皓々たる雪、皓齒。白色の形容辭。例 白皚々、皚の意に同じ。例 月出で、皎たり。

すの部

【す】

不弗

不_フ然也と註す。俗に「ナイ」といふに當る。未來にかかる時は「ジ」と訓みて「マイ」といふ意となる。例 梁惠王不果所言、城久不拔。

【すきま】

弗

不_フと同じ意なれど、其意重し。公追齊人、至_リ檣_ニ弗_及と春秋にありて、公羊傳の註に、弗者不_レ之_レ深者也と見ゆ。

【すきま】

すきまと訓む。「ヒビ、ワレメ」の事なり。それより人事のうへにも轉用す。左傳に人無_レ覺、則妖不自_レ作とあるが如きをいふ。「スキマ」とも「ヒマ」とも訓む。穴のあきたること。罅隙と連用す。

【すく】

過邁 絶

經過の義。又轉用して、軽く助語の如くに用ゐることあり。例 已に讀過す。已に看過す。

進み行くこと。それより英氣の進みて、かへらぬにも用ゐる。例 邁進、邁過。

豪邁。英邁。水を横_レぎりて涉ること。故に、過の意に用ゐることあり。又たちこゆる意に用ゐる時は、類を離るゝ意あり。例 絶海の樓船、絶妙の好辭、精力絶倫。

【すくなし】

少寡 鮮 尠 尠

すの部 すきま すく すくなし

【す】 前 差 捨 棄 廢 委 釋 捐 遺 業 已 既

後ゴの反對ハンタイ。前方ゼンバウへすゝみ出イづること。進スよりは弱ヨワし。例 前進ゼンシン。席セキを前スむ。膝ヒザを前スむ。
 人に食物シヨクモツを饗キヤウしすゝむる意。例 膳差ゼンサ。
 捨シヤ棄キ廢ハイ委キ釋シヤク捐ニ遺ニ。
 用の反對ハンタイ。用ヨウゐるべきものをとりあげざるをいふ。例 取捨シュシヤ。用捨ヨウシヤ。喜捨キシヤ。
 不用フヨウのものとしてすつる意。故ユエに捨シヤよりも其意強ソノイし。例 民タミを棄スつ。甲カウを棄スて走ハシる。投棄トウキ。拋棄ハウキ。廢棄ハイキ。
 「ステモノ」又は「スタリモノ」にする意。例 廢物ハイブツ。廢業ハイゲツ。廢止ハイシ。
 先方ゼンバウに任マカせてすておく意。例 溝壑コウカクに委キす。落花地ラカクヂに委キす。
 持ちたる物モノを手テよりはなす意。例 手卷テクワンを釋シヤクつる能アタはず。
 不用フヨウとして、他に仕末シマツして置オく意あり。例 金キンを山ヤマに捐スつ。義捐金ギエンキン。
 とりのこし置オきて、先サきへ行ユく意。例 未イマだ仁ジンにして其親ソノオヤを遺ユツる者モノは有アらず。遺棄キキ。
 既キ業イ業グ

【すなはち】 既 已 業 則 即 乃 輒

將マサニの反對ハンタイ「ツクル」、「ヨハル」とも訓ヨみて、全マツタく事コトの終ハりたるにいふ。
 未イマの反對ハンタイ。事コトの今イマ成ナりしこと、今イマ終ハりしことにいふ。
 勢イキホヒ定ヒサダまりて、跡アトに引ヒかれざる場合アヒをいふ。
 則ソク即ソク乃ナ輒ナツ便ベン載サイ。
 上カミをうけていふ辭コトバ。法則ハフソク規則キソクの則ソクにて、原因結果ゲンインケツクワの法則ハフソクを述ノぶるにいふ。「ソ
 ノトキハ」といふに當アる。例 大叔タイシユクに與アタへんと欲ホツせば臣請シンコふ之コレに事ツカへん、若與モシアタ
 へざれば則請スナハチコふ、之コレを除ノゾかん。
 「スグサマ」「デキニ」の意にて、「取モ直サズ」と譯ヤクす。其場ソノバを離ハナれぬこと。例 即ソク
 刻コク。即時ソクジ。即今ソクコン。即席ソクセキ。
 「ソコデ」の意。此時コノトキより彼時カノトキに移ウツる渡合ワタリアヒの辭コトバにて、上カミの文ブンと下シモの文ブンとの繼目ツギメ
 に置オく。畢竟詞ヒツキヤウの移ウツりめをゆるやかに言イひ出す意ユエなる故ユエに、緩之辭ウスルコトバと註チユウせり。
 「適字ソクジ」とも通用フウヨウす。例 河カに至イタる、乃復スナハチカへる。
 其度毎ソノタビトに「イツデモ」の意。例 張負チャウフが女孫メコソノは、五度嫁イツタビカして、夫輒死ラツトスナハチシす、人敢ヒトアヘて
 娶イトることなし。「輒」は輒の俗字なり。

便

手早くの意。時の上につきての辭なり。即よりは意緩く輕し。例 便之を殺す。

載

受け載する義にて、上を受くる詞。「タヤスク、ツヒ、ソノママ」といふに當る。例 載 欣び 載 奔る。載 飛び 載 止る。

【すなほ】

朴 素質

器の地下作り、又はあらかき作り、とも譯す。例 質朴 朴直 淳朴。かざりのなきこと。白ききぬ、白くて染めぬ衣。例 朴素 質素。

質素

文の反對にてかざりなきこと。例 質素 質實 朴質。

【すべて】

總 凡 都 渾 統

絲をくゝる意より、轉じて概括の意に用ゐる。例 總計 總數 總理。

「大ヨソ」の意。例 凡例。

寄せ合せて、一體にみな の意。

都に同じ。

一つにする意。例 統一 統計。

【すみやか】

速 亟

遅の反對。猶豫せぬこと。例 早速 速斷。

急にする意。亟は「シバシバ」の意の時には音キ也。

【すむ】

住 棲 栖

「止ル」も訓みて、居所を定めて居る意。

假りに住む意。又、鳥獸蟲魚などの巢に居ること。

棲に同じ。

【すむ】

清 澄

濁の反對。水のすむこと。例 百年河清を俟つ。河の清むを俟たば、人壽幾何ぞ。

濁の反對。水のすむこと。

水静而清と註す。水のすみわたりたること。

澄

せの部

【せほし】

狭 隘 褊 窄

背 倍 乖 負 誦 諳 夫 其

抗カウ反駁ハンパク反對ハンタイ謀反ボウハン
人を背セにして、ふりすつる意。例 背反ハイハン 違背キハイ 背戾ハイレイ
背ハイに同じ。

さからひ違タガふ意。例 乖離クワイリ 乖背クワイハイ 乖反クワイハン
物をうしろにする意。例 恩オンに負ムく。徳トクに負ムく。

【そらんず】

誦ソウ 諳セン

物モノを便オボりとせず、そらにて事物ジブツを覺オボゆること。例 諳記アンキ
さしつかへなく述べたつること。例 諳誦アンソウ 通誦ツウソウ 誦讀ソウドク

【それ】

夫フ 其キ

軽くして、指サす所トコロなきが如ゴトく、發語ホツゴに似ニたり。
「ソノ」と讀ヨむ時トキよりは、輕カけれど、夫フよりは狭オモくして重オモし。

たの部

【たかし】

高カウ 崇シウ 隆リウ 喬キウ

高 崇 隆 喬 樓 閣 互 迭 遞 差 違

卑ヒ下ゲ、低等テイテイの反對ハンタイにて、無形ムケイ、有形イクケイ共に用モチゐらる。

山の極キバめて高タカくて、見るも恐オウろしきばかりなるをいふ。例 崇廣シウクワウ 崇拜シウハイ 尊崇ソウシウ
中央チュウウの、弓形キョウケイに高タカくなれるをいふ。例 穹隆キウリウ
高タカくそびえ立てるをいふ。例 喬木キウボク 喬岳キウガク

【たかどの】

樓ロウ 閣カク

ニ階ニカイ屋ヤなり。例 城樓ジヤウロウ 望火樓バウクワロウ
高タカきやづくり也。例 高閣カウカク

【たがひに】

互ゴ 迭テツ 遞テツ

物事モノゴトの、入りちがひ、食クひ違チガひになりたるをいふ。例 交互カウゴ
更カハりあふこと。例 更迭カウテツ 迭立テツリツ
次々ツギツギに承ウケけ續ツくるをいふ。例 驛遞エキテツ 遞信テツシン 遞送テツソウ

【たがふ】

差サ 違キ

事物ジブツのくひちがふをいふ。例 差違サキ 參差サンシ
くひちがひ離ハナるゝ意。例 違背キハイ 違反キハン 相違サウキ 違法キハフ

たの部 たかどの たがひに たがふ

【たから】

寶財貨賞

すべて珍重すべきもの、稱金銀のみに限らず。例至寶珍寶

人の用に供すべきもの、稱例財政財産

財寶のこと。例貨幣金貨

それだけの價值あるもの。

【たき】

瀑瀧

高處より落ちくだる水をいふ。例瀑布布曳瀑華嚴瀑

奔湍也と註す。急流のことなり。國語に、たぎち流る、たぎる、などいふに當

【たくはふ】

貯蓄儲

入用だけの物をかこひ置くこと。例貯藏貯粟貯蓄

取集めて藏め置くこと。餘裕さへあれば藏めおくなり。例蓄財蓄髮蓄積

立て代への物を、豫め用意にたくはへおくこと。例國儲儲君倉儲儻石の

儲

【たくひ】

類匹疇屬比倫

似よりたるをいふ。例比類なし類似

ならびたること。例秦晉は匹なり何を以て我を卑むと左傳に見ゆるが如し

似よりたること。例匹疇

其の或物の部類のこと。

釣合の等しきこと。

筋を引きたること。例人倫絶倫

【たくみ】

巧工

拙の反對。具合よく取合はすこと。例巧匹巧笑

職人といふこと、其事に専らなる人をいふ。例工人精工

【たけなほ】

酣闌

酒宴の最中の意より、物の盛りなるをいふ。例興酣宴酣

過半事の終りたる時をいふ。例酒興闌

【たすく】

輔佐佑助扶援翼相資贊

【た】 唯 資 相 翼 援 扶 助 佑 佐 輔

兩旁より、車輻の倒れぬやう、控木をなし置く意にて、轉じて倒れぬやうに、たすけて進ましむる意。例 輔佐 輔弼 輔助 輔行。
 手の身にそへるが如く、傍にありてたすくる意。例 良佐。
 佐に同じ。佑は祐とも書く。
 力を添へてたすくる事。例 助力 助勢 助手 救助。
 手を添へて支へたすくる意。例 扶持 扶助 扶翼 扶老。
 引き上げたすくること。例 後援 援引 援兵 聲援 外援。
 鳥の翼の如く、身をたすくる意。又、鳥の子を翼の中に入れて、養ふ故に、養育の意ともなる。例 輔翼 扶翼 翼贊。
 輔の意に似たり。且、長上の缺點をたすくる意あり。
 外よりとりて、たすけとする事。例 資力 外資 資産。
 言語を以て、たすくる意。例 贊助 贊辭。
 唯 惟 只 但 徒 音
 「バカリ」と譯す。獨の義なり。例 唯天を大なりとす。其れ唯聖人乎。
 殆 助語の如くに用ゐらる。例 只今 只獨。
 「バカリ」といふ意に用ゐる。「タダシ」とよむ時は、違へり。
 「タダ」「タダニ」「空シク」「イタヅラニ」などの意に用ゐらる。
 疑問又は、打消の語を添へて用ゐる。例 不啻不敢含怒 何啻……の如く用ゐられ、一字にて用ゐることなし。

【た】 唯 資 相 翼 援 扶 助 佑 佐 輔

音義共に唯に同じ。
 殆 助語の如くに用ゐらる。例 只今 只獨。
 「バカリ」といふ意に用ゐる。「タダシ」とよむ時は、違へり。
 「タダ」「タダニ」「空シク」「イタヅラニ」などの意に用ゐらる。
 疑問又は、打消の語を添へて用ゐる。例 不啻不敢含怒 何啻……の如く用ゐられ、一字にて用ゐることなし。
 戦 闘 格
 両方より打合ひ勝負を決するをいふ。例 戦争 戦陣 戦端 戦役 戦没 混戦 戦亂。
 勝を争ふことにて、個人同士の、争ひをいふ。例 格闘 決闘 争闘 戦闘。
 両方より打合ひ組合ふこと。例 格闘。
 叩 敲 扣
 音の聞ゆるやうにたたくこと。例 叩頭 叩門。
 叩よりも甚しく打ちたたくこと。例 推敲 敲門。

扣 叩に同じ。

【たす】

正訂 糺匡 規繩 格貞 (自動詞の時にはタダシ) 他動詞の時

邪の反對よこざまなるを、眞直にたす意。正義、正誤、正道、正理、改正。

文字の誤を吟味し直すこと。訂正、訂盟、訂約。

監督吟味して、曲れるを直すこと。糾と書くも同じ。糺問、糺明。

救ひ直す意。匡救、匡正。

「ブンマハシ」の事にて、法を以てゆがみたるを直す義。規諫、規止。

墨繩にて、ゆがみを正す義。繩愆。

正の意。法度格式に合ふやうに正すこと。

正に固の義を兼ね。忠貞、貞婦、貞女、貞節、貞烈。

【たぢち】

直 徑

すぐさまといふ意。一老父の褐を衣たるものあり良が所に至り、直に其履

を圯下に墜す。

手短にの意。徑に布衣より登用す。徑に往いて蜀漢を巻き、三秦を定めむ。

【たたる】

糜爛

糜爛と連用す。粥の如くに、たたること。財力を費消し民力を疲弊せしむる

ことに用ゐる。

焼けたるゝこと。

忽乍 倏頓

思ひがけなく「フット」の意。忽焉、倏忽。

「チラト」。又は「チヨット」の意。瞬間に變化する意。乍見、乍滅、燈將に

滅せんとして、乍ら明なり。

忽に似て、更に速力の敏疾なるをいふ。

遽かの意。滯なく終結する意をも含む。

立建 起堅 植樹

仆の反對、たしかに立てる意。獨立、孤立、確立、成立、設立、立后。

組みたつる意に、始むる意をも兼ねたり。建國、建設、建業、建造。

坐の反對にて、身を起して立つ意。起立、起居、發起、起臥。

たの部 たたる たぢち たつ

【た】 堅植樹 断

横ヨコになれるものを堅ツルつる意。
木キを植ウゑ立タつる義ギより轉テ用ヨウす。例レ其杖ソノツエを植ウて、芸ケる。
植ウに同じ。例レ徳トクを樹ツつ。黨タウを樹ツつ。

【た】 絶 裁 截

断ツグ絶ゼツ截セツ裁サイ裁サイ断ダン断ダン獄ゴク果クワ断ダン
物モノを二ニつにたチちキるコトにも、又マ切キり離ハれたるコトにも、轉テじては決ケツ断ダンの意イにも用モゐる。例レ二人心ニニシノココロを同オじくすレバ、其利金ソノリキンを断タつ。断斤ダンベン断碑ダンヒ断雲ダンウン断絶ダンゼツ

糸イトのキれたる義にて、それより、物モノのキれて續くベきあとのなきコト。例レ絶ゼツ

筆ヒツ絶交ゼツカウ絶壁ゼツベキ絶命ゼツメイ

きりたチて、續ツかずなれる意。絶ゼツに似ニたり。例レ截断セツダン直截チョクセツ

衣服イフクにスる布帛類をたツつコトにて、長ナガさをたチ、餘アれるをたチて、宜ヨロしくスる

義ギ裁縫サイホウ裁断サイダン

【たづぬ】 尋 原 討 踪 繹 繹

ある事コトに引ヒきツぎて、それより其筋ソノスヂに據ヨりたづぬ求むル事コト。例レ尋求ソウキウ尋問ソウモン

【た】 原 討 踪 繹 繹

物事モノゴトの源ゲンをおしたづぬル意イ。例レ始ハジメを原ハラね、終オハリを要ヨウす。
搜サウりたづぬル義ギ尋ソウよりも重オモし。例レ討論タウロン討究タウキウ

足アシあとをしたひたづぬル意イ。例レ踪跡ソウセキ失踪シツソウ

糸口イトグチを引ヒきツぎて、たづぬル事コトに轉テ用ヨウす。

【た】 干 盾

干カン丸マを防フぐ武器ブキ。

干カンに同オじ。

【た】 縦 經 表

横ヨコの反ハン對タイ。
緯キの反ハン對タイ。元來織機ゲンライオリハタの經絲ケイトにて、緯絲ウキイトに對オす。
延エンの反ハン對タイ。東西トウサイを延エンといひ、南ナン北ホクを表オウといふ。

上ウジヤウ奉ホウ獻ケン呈テイ。
さしあぐるコト。此字コノジは元下モトシタの反ハン對タイにて、物モノのうへにスる意なレバ、それより「アグ」とも「タテマツル」とも訓クじて、貴人キニンに物モノをあぐるコトに用モゐる。

【たのむ】

頼 怙 恃 憑 負

力にして、たよること。例 信頼 依頼

堅固なる要害の如く、我身のたよりにすること。例 怙恃

手に物を持つが如くに、心のたよりにすること。例 負恃 徳を恃む 力を恃む

物にもたれかゝり、よりかゝる意

うしろだよりにする意。例 貴を負む

【たひらか】

平 坦 夷

高低なく、かたづらぬこと。例 昇平 太平 清平 山平なり 潮平なり

平安の義。例 平坦 坦易 道を履むこと 坦々たり

其義平に同じ。險夷と對用す。例 王道陵夷 又剿滅する意にも用ゐる、其時は「タヒラグ」と訓す。三族を夷ぐなどいふこれなり

【たふ】

堪 耐 任 勝

こらへ忍びて、物事をなし遂ぐる事。例 堪忍

【たふる】

耐 任 勝 尊 貴 尚 崇 上 倒

迫害を意とせずして、もちこたふる事。例 耐久 忍耐

我力量の續くこと。例 其事に任ふ 責任 大任

物に争ひてうち勝つ意。例 魚鼈 食ふに勝ふべからず

尊 貴 尚 崇 上 (自動詞の時はタフトス)

卑の反對。道徳、爵位、年齢等の高さを敬ふ稱。例 至尊 尊長 尊君

賤の反對。官位高く上品なる人、又は價の高きものをいふ。されど、敬ふ意はなし。例 貴顯 貴賓 富貴 貴重

あがむることにて、畏敬の意。尊よりも其意強し。例 崇尊 崇敬 崇拜

大切に於て我上に置き、たつとぶこと。尊に似て其意弱く好む意あり。例 高尚 尚 風尚 尚武

音義共に尚に同じ。

倒 仆 斃 殞 顛 踣 僵 (自動詞の時はタフル)

仰のけざまに、たふるゝこと。又、さかさまになるにもいふ。例 轉倒 絶倒 倒懸

たの部 たみ たる たれ ちの部 ちかし

【たみ】

民氓

廣く國人を稱する辭。公羊傳に、士農工商を四民と云ふとあり。流れわたりの民にて、土著の者にあらぬをいふ。

【たる】

足 瞻 給

物事の十分なること。例 充足。物事のゆきわたること。例 富瞻。瞻の意に同じ。例 支給。補給。家ごとに給り、人ごとに給る。

【たれ】

誰 孰

専ら人を指していふ。例 問ふ是れ誰が家の墳ぞ。蕭相國即死せば、誰をして之に代らしめむ。誰と同じ意なり。

ちの部

【ちかし】

近 邇 庶

【ちかふ】

盟 誓 矢

遠の反對。隔りの少きこと。邇の反對。はるかならぬこと。近の如く廣き意に使用せず。殆ど接近せる意。

盟

誓

矢

神に告げてちかふをいふ。その時は、牲を殺して神に供へ、その血を器皿に入れて共にすゝり、ちかひに背かば、この牲の如くに神罰をうけんと意。故に盟字に皿を交ふ。例 會盟。盟主。

言を以て約束すること。故に誓字に言を交ふ。盟よりは輕し。例 誓約。宣誓。誓言。

【ちち】

父考

父親のこと。

【ちまた】

街巷衢

ちの部 ちかふ ちち ちまた

【ちり】街 巷 衢 塵

真直の大道をいふ。曲れる小道をいふ。四方に路の分れたる辻路をいふ。塵埃

乾ける土の、粉末になれるをいふ。それより、微細の物の散飛せるもの、稱とす。

塵の空中に漂へるもの。

【ちる】埃 散 換

萃の反対にて、流散の義也。

萃の反対。あつまらぬこと。大學に、財聚れば則ち民散す、財散すれば則ち民聚る。とあるが如きをいふ。

つ の 部

【ついで】

序 叙 秩

【つかさどる】序 叙 秩

ものごとの次第をいふ。長幼序あり。順序。秩序。序に同じ。序に同じ。

掌 典 司 主 宰 宰

おのが職分だけをつかさどること。職掌。分掌。執掌。或事を十分に支配する意。典藥。典膳。職を典る。

下の者を支配する意。有司。國司。おのれ主となりて、大切に取扱ふこと。主宰。主要。

【つかさどる】宰 主 司 典 掌

人の頭となりて、差圖すること。主と相似たり。宰領。主宰。宰相。使 仕 事

指揮してつかふこと。使命。指使。役使。使者。主人をもちて奉公すること。奉仕。給仕。任仕。

【つかさどる】使 仕 事

長上の人の用事をつとむること。君父に事ふ。師に事ふ。疲 憊 罷 羸

疲 憊 罷 羸 就 著 即 付 附 突 衝

俗に「クダビレル」といふに當る、精神氣力の衰へ弱ること。
 疲に同じ。例 老憊。
 憊に同じ。益州罷弊すと出師表にあるが如し。
 やせ衰ふること。例 羸弱 老羸 羸兵。
 就 著 即 付 附
 其處へ行くこと。近く寄りそふこと。例 利に就く。死に就く。就職 去就 成就
 密接せるにて、ひたとつくこと。例 密著 著用 著服 土著 著實 到著
 登る意。例 即位 座に即く。
 授け渡す意。例 付託 交付。
 つき従ふ意。例 附庸の地 附屬 驥尾に附く。附會 附錄 附言 附隨
 突 衝 撞 擣 擣 擣
 急につきあたる。不意に進み出る。例 突起 突出 突擊 突貫 突破 突進 突
 然
 つき當る意なれども、突よりはその意弱し。例 衝突 怒髮冠を衝く。衝路 衝

撞 擣 擣 繼 續 嗣 接 次 襲 亞 告

出 衝入。
 或物を或物にうち當つること。例 鐘を撞く。撞著。
 白にてつくこと「ウツ」とも訓む。例 藥を擣く。砧を擣つ。
 五穀を白にてつくこと。例 米を擣く。餅を擣く。
 續 繼 嗣 接 次 亞 襲
 斷の反對。斷絶せるものを、つぎつづくること。例 陸續 斷續 連續 繼續
 事物の後を受けつぎ、又は絶えたるをつぐこと。例 繼續 繼承 後繼者 繼母
 よつぎにて、親の後を承けつぐこと。例 嗣子 繼嗣
 ニ物をつぎ合はすること。例 接木 接近 密接
 順序次第をつぎゆくをいふ。例 次官 日次 次第 次長 目次
 次に同じ。例 亞流 亞聖
 前者のやうに、重ねて受けつぐ意。例 襲爵 世襲 因襲
 告 諭 誥 詔
 他に知らしむること。「コウ」の音の時は、上より下に告ぐる時。「コク」の音の

【つつみ】

堤防塘坡塙

土を築きて水を遏めたる者にて、其の兩方に水のあるをいふ。

堤に似て廣く、一方にのみ水のある者。

水抜きのある處にて、堰の類をいふ。

野池をいふ。其の周圍、土を築きて土手となりをるにより、堤防と同じやうに用ゐる。

小き土手のこと。例 柳塙 桃花塙

【つつむ】

包裏韜蘊

風呂敷などにて、物をつゝむ意。

袋の中に入るゝこと。

外に顯さず、他に知らしめぬやうにすること。例 韜晦

深く藏めて、外に洩らさぬこと。例 蘊蓄 蘊奧

【つとむ】

勤勉 務勗 力努

情の反對。情らず勵みて精出すこと。例 勤學 勤行 勤苦 勤勞 勤王 勤番

務勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

勗

つ の 部 つ つ ゐ

【つねに】

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

常

力の及ばぬを堪へ忍びて、精出すこと。例 勉強 勉學 勉勵 勤勉
力を一途にこめて従事すること。例 職務 事務 公務 本務 政務 國務 勤務
先務 急務 義務 專務
勉に同じ。勵ます意に用ゐること多し。
全力を擧げてつとむること。例 力戦 力行 力學 努力
一息に精力を出し、力をこめて勵む意。
常 恆 恆 每 庸

つ の 部 つ つ ゐ

庸

常に同じ。庸劣。庸醫。庸才。庸主。庸君。庸人。

【つひに】

遂終竟卒

此事よりして、彼事に及び、それを成し遂げたる意。

始の反対。「果テマデ」「果テハ」「トウトウ」などの意。終結。終局。終末。

「ヲハリ」と訓み、畢意と熟するが如く、つまりといふ意なり。始中終をこめていふ語。

卒

始と中とを除き、終局の結果をのみいふ。「ハテハ」といふ意。

【つまびら】

具備

手落ちのなきをいふ。備も同じ意なり。

【つまびら】

詳審諦

畧の反対。明細にすること。詳説。詳解。詳細。詳密。

念を入れて、確實にすること。審査。審判。審問。審議。審理。

シカトの意。君諦視之、勿誤也。諦聽。

【つまびら】

蹶 跌 蹉 跎 躓

足をくじきて、はねかへること。

自分に、うかとふみはづして、つまづく事。故に足扁に失の旁あり。

足のもちれて、つまづくこと。蹉跌と連用す。

足の他へそれて、ふみつけの定まらぬこと。それより時を失ひ、志を遂げぬことに轉用す。蹉跎たり白髮の年。

足の物にさはりて、つまづくこと。廣く用ゐる。顛蹶。踰躓。

罪辜

とがの定まりたること。天有罪を討す。匹夫罪無し、壁を撞いて其れ罪あり。

とが人に、名の付きたること。罪よりは輕し。無辜の民。

【つよし】

強勁

強勁。強勁。強勁。

弱の反対。力の多大なること。

強の上に剛の意を含む。

【つらなる】

剛氣にして忍耐力のつよきにいふ。

連 聯 陳 列 羅 (自動詞の時はずらなる)

物と物との、次々につぎつぎたるをいふ。自他通用す。例 連山 連日 連珠 連理

流連

畧、連に似たり。されど連は一筋につらなる意に用ゐられるれど、聯は幾筋にも

なりて續く意に用ゐらる。例 聯鎖 聯隊 聯邦 聯合艦隊 聯合軍

順序を立て、ならべ敷く意。例 陳列 敷陳

ならびつらなること。例 列坐 行列 羅列 排列 列聖 列國 列立

網の目、又は絹の目の如く、細かに順序正しく並ぶこと。例 羅列 星羅

ての部

【てらす】

照 燭

光をさし向くる意。例 日月照す。照臨 照覽

照よりも小き光をいふ。燭燭の燭の義なれば轉じて照す意に代用すること

羅列陳 聯 連

燭照

間々あり。

との部

【とがむ】

咎 尤 科

「トガ」と訓む時は名詞となる。道理、法度、約束等に違ひたるを、責めとがむること。例 既往は咎めず。

覺えず爲したる失錯をとがむること。

「トガ」とも、「トガメ」とも訓す。掟の箇條なり。例 姦を作し科を犯す。

【とき】

時 秋 辰

一日中の時間、一年中の四時、又は廣く時節の意に用ゐらる。例 時刻 時期

時間 時限 瞬時

秋は四時中物の成熟する時なれば、肝要の時節といふ意に轉用して、「トキ」と

訓む。例 危急存亡の秋。

一歳十二月に、日月の會すること凡そ十二度あり、之れを十二辰と名づく。そ

【さぶ】 詢 咨

事をとひ謀る意にて、相談すること。例 咨問、咨詢、信實にとひ謀る意にて、畧咨に同じ。

【さぶひ】 飛 霏

つばさにて行くこと。物のほら／＼と一面に飛び散るさま。例 雨霏々、雪霏々、烽燧

【さいほし】 燧 烽

のろしをいふ。唐詩に烽火照西京とあるが如きをいふ。元來きりび(左傳に鑽燧改火などあること)の義なれど、烽火の義に轉用す。

【さいほし】 遠 遐

近又は邇の反對、開の隔りたること。例 遠國、遠地、遠行、邇の反對、はるかなる意。

【さいほし】 匱 乏

ことたらのぬこと。例 缺乏、貧乏、窮乏、無くなりかゝること。

【さいほる】 通 徹

塞の反對、行きつまらぬこと。つかへぬこと。例 交通、通用、貫通、開通、精通、通計、通道、通路、神通。

【とも】 融 透

底までとほりぬける意。例 徹頭徹尾、徹底、貫徹、徹上徹下、つきぬくる、すぎとほる、ぬきとほる意。例 透徹、透明。

【とも】 友 朋

同じ師に就きて學べる同門の人をいふ。例 同朋、志を同じくして親交せる人をいふ。例 益友、良友、畏友。

【とも】 輩 曹 儕 徒

自分と同じ位の連中。同じ事に従事する仲間の人々。似よりたる者の稱。自分の手下のもの。

【かんじび】

燈燭

蠟燭にても、油にても、火をともしたる明りをいふ。

蠟燭に火をともしたる者の稱。

【かんじ】

共 俱 偕 與

共同の意にて、多數の者相集りて、互に相助けて一事を爲す意。

一處にの意。例 玉石俱に焚く。兩虎俱に闘ふ。馬と俱に斃る。

一處にうち揃ふ意。例 偕老同穴。偕樂園。偕行社。

彼も此もともにの意。事物を相手にする意。例 與に謀りがたし。

【かんじ】

捕 捉 囚

逃亡者を追ひかけゆきて、とらふること。例 追捕。逮捕。生捕。捕獲。

手どりにすること。

召しとること。囚人といへば、召しとらへられたる人にて、名詞となる。例 幽囚。死囚車。

【かんじ】

俘 虜 擒

軍所獲也と註す。

生得曰虜と註す。繩にてしばりたるいけどりなり。

戰勝執獲曰擒と註す。我物にして、手ごめにとらふること。

【とる】

取 執 探 把 攬 操 乘

捨與の反對、とりて我物にすること。えらびとること。とり用ゐること。例 取捨。奪取。

固く手に持ちて放さぬこと。例 固執。執行。執筆。執權職。執念。執達吏。

手にてえらびて摘みとること。例 採用。採集。採擇。

持つ、握る、攪む等の意にて、執よりは輕し。例 把握。把持。把束。

とり集めて、手にて持つこと。例 集攬。總攬。

固く持ちつゝけて放さぬこと。例 操守。志操。操持。貞操。

手に握る意。有形にも無形にも用ゐらる。例 秉彜。秉燭。秉矛。

乗 操 攬 把 探 執

なの部

【ながし】

長チャウ 永エイ 脩シウ

短タンの反對ヘンタイ形體ケイタイの上ウヘにも、時日ジジツの上ウヘにも用モチゐらる。比較上ヒカクジョウの語ゴなり。例レ長夜チャウヤ、長壽チャウジユ、長生チャウセイ、長年チャウネン、長月チャウゲツ、長距離チャウキリ、長大息チャウダイソク、廣長舌クワウチャウゼツ、時日ジジツのながき事コトにて、形體ケイタイの長ナガき意イに用モチゐず、又、比較上ヒカクジョウの語ゴにもあらず。

永

例レ永久エイキウ、永世エイセイ、永年エイネン、永劫エイゴク、永眠エイミン、永晷エイキウ、年壽永ネンジュエイ、

たけ長く末細スエホソきこと。例レ脩竹シウチク、脩尾シウビ。

【なかたち】

媒バイ 妁ゴク 介カイ

婚姻コンインのとりもちをすること。

媒バイに同じ。媒妁バイゴクと連用レンヨウす。

雙方サウハウのひきあはせをすること。紹介セウカイとも、媒介バイカイとも連用レンヨウす。

【なかれ】

勿フツ 母ボ 無ム

禁止キンシの語ゴ。例レ過アヤちては則スナハち改アラむるに憚ヒカること勿ナカれ。

母 無

禁止キンシの辭コトバなれど、勿フツよりは輕カホし。母ボよりも輕カホき禁止キンシの辭コトバ。「ナシ」と訓コトむ時は、有イウの反對ヘンタイとなる。例レ己オノレに如シかさるものを友トモとすること無ナカれ。

【なこ】

鳴メイ 啼タイ 泣キツ 哭コク

鳥獸チウゾクの聲コエを出すことにて、悲喜ヒキキ共に用モチゐらる。名譽メイヨの世ヨに聞キゆるにも用モチゐらる。例レ悲鳴ヒメイ、鶴九阜ツルキウブに鳴ナく、鳴鑿メイゾク、佩環ハイクワンを鳴ナす、其名ソノナ天下テンカに鳴ナる。

聲コエを立て、なくこと。人間ニンゲンにも、鳥獸チウゾクにも用モチゐる。鳥獸チウゾクに用モチゐる時は、悲喜ヒキキの區別クベツなく用モチゐる。例レ啼鳥タイチウ、啼泣タイキツ。

聲コエなく、涙ナミダを出ダしてなくこと。例レ號泣ガウキツ、悲泣ヒキツ、哭泣コクキツ。

聲コエをあげ、涙ナミダを流ナガしてなくこと。泣キツより重オモし。例レ號哭ガウコク。

【なげうつ】

抛ハウ 擲チキ

投ナげ遣ヤること。投ナげ棄スつること。例レ拋棄ハウキ、拋擲ハウチキ、投ナげつくること。例レ地チに擲ナゲちて金石キンシキの聲コエあり。

【なげく】

嘆タン 嗟サ 慨ガイ

なの部 なく なげうつ なげく

